

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

国道212号（中津日田道路：本耶馬溪－耶馬溪）
道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

古庄屋遺跡Ⅱ

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター

国道212号（中津日田道路：本耶馬溪－耶馬溪）
道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

こ じょう や
古 庄 屋 遺 跡 II

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は国道212号（中津日田道路：本耶馬溪－耶馬溪）道路改良工事に伴い、大分県教育委員会が発掘調査を実施した古庄屋遺跡第二次発掘調査の調査報告書であります。

本遺跡が所在する中津市本耶馬溪町には、縄文時代遺跡である県指定史跡粉^{へび}洞穴や弥生・古墳時代の集落である下^{しも}屋形^{やかた}遺跡などがあり、先人たちの生活の跡をたどることができます。

今回報告する古庄屋遺跡では、中世居館の姿を明らかにすることができました。この遺跡は、本地域のみならず大分県の歴史時代研究に欠くことのできない貴重な遺跡であるといえます。

本書が広く活用され、文化財の保護・啓発並びに地域史研究の一助となれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 長 小 玉 学 司

例 言

- 1 本書は、平成15年度に実施された大分県中津市本耶馬溪町落合所在の古庄屋遺跡第二次発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、国道212号（中津日田道路：本耶馬溪－耶馬溪）道路改良工事に伴い、県中津土木事務所の依頼により大分県教育委員会が実施したものである。
- 3 調査の実施にあたり、本耶馬溪町教育委員会の協力を得た。
- 4 遺構の実測は、調査員の栗原眞、後藤一重、阿比留志郎が行った。
- 5 遺構の写真撮影は、調査員の栗原眞、阿比留志郎が行った。
- 6 遺物の実測及びトレースには、大分県教育庁埋蔵文化財センター整理作業員の助力を得た。
- 7 本遺跡出土遺物ならびに遺構・遺物の実測図は、大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
- 8 本書で使用する方位は、いずれも真北である。磁針方位は真北より西偏6°20'である。
- 9 本書で使用する遺構番号は、第一次調査から引き継いだ番号を使用している。
- 10 本書の執筆は、後藤一重が行った。
- 11 本書の編集は、後藤一重が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査団の構成	1
第2章 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	4
1 掘立柱建物跡	5
2 土壇墓	15
3 土壇	29
4 井戸	58
5 溝	61
6 その他の出土遺物	65
第4章 まとめ	72

第1章 はじめに

1 調査にいたる経過

古庄屋遺跡は、大分県中津市本耶馬溪町大字落合字古庄屋（旧下毛郡本耶馬溪町）に所在する。

遺跡が位置する大分県北部は、福岡県境に沿うように、山国川の下流から中津市、三光村、本耶馬溪町、耶馬溪町、山国町の1市3町1村がみられたが、平成17年にこれらが合併し、新たに中津市となった。

山国川流域の地形をみてみると、旧中津市の下流域で広大な平野を形成するが、旧三光村以南の中・上流域ではまとまった平野部が少なく、山国川本流や山国川に流れ込む河川に沿い、狭小な谷底平野などが形成されるのみである。中・上流域の大部分を占める山地地域では、河川に浸食された山々に奇岩が連なり、独特な山容を呈する。これらが、四季折々の自然と織りなす様々な景観は、古より人々の心をうつものであった。現在、国指定の「名勝 耶馬溪」として、その景観保護が図られている。

調査は、国道212号（中津日田道路：本耶馬溪－耶馬溪）道路改良工事に伴い実施された。中津日田道路は、県北の中津市と大分県西部に位置する日田市を結ぶもので、県内の道路交通網体系整備に係る高規格道路である。

今回調査を実施した地区は、平成11年度末に県土木建築部から事前の分布調査依頼があったものである。県教育委員会文化課は、平成12年度当初に分布調査を行い、当地区は遺跡の存在する可能性が高いため事前の試掘調査が必要であると判断した。その結果は、直ちに県土木建築部に通知された。試掘調査は、用地買収等が終了した平成12年11月に、県中津土木事務所の依頼を受けて県教育委員会文化課により行われた。その結果、中世の遺構・遺物が確認されたため、県土木建築部と協議し本調査を行うこととした。

本調査は工事工程の関係から、一次と二次に分けて行うこととなった。第一次調査の対象面積は約3,000㎡で、平成13年1月9日から3月13日にかけて実施した。その調査成果については、平成14年3月に大分県文化財調査報告書第141輯「古庄屋遺跡」として、大分県教育委員会より刊行されている。

第二次調査は、第一次調査区の東側、西側、北側に調査区を設けた。調査面積は約7,300㎡で、平成15年9月17日から平成16年3月15日の間に行った。また、平成17、18年度には報告書作成にむけた整理作業を行い、平成19年3月の本書刊行にいたった。

2 調査団の構成

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育委員会教育長	深川 秀生
	大分県教育庁文化課長	今永 一成（平成15年度）
	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	渋谷 忠章（平成17年度）
	同 所長	小玉 学司（平成18年度）
調査員	大分県教育庁文化課主幹	栗原 眞（平成15年度）
	同 副主幹	後藤 一重（平成15年度）
	同 主査	松本 康弘（平成15年度）
	同 主査	安部 純一（平成15年度）
	同 囑託	阿比留志郎（平成15年度）

第2章 歴史的環境

遺跡は、福岡県と大分県の県境付近を北流する山国川流域に位置する。山国川は周防灘に注ぐ下流域においては広大な沖積平野を形成するが、流域の多くの地域では山塊が川に迫り、狭小な谷底平野が続く地形を呈している。下流域の中津平野周辺では、各時代の遺跡が多数確認されている。しかし、中上流域の旧本耶馬溪町、旧耶馬溪町、旧山国町では、確認されている遺跡の数は著しく少なく、下流域との差は明らかである。これは、両者の地形的な違いに起因するものであろう。

本遺跡の所在する旧本耶馬溪町域は、遺跡の発掘調査例も少なく、考古学的情報から体系的に歴史叙述するのは難しい。悉情的な遺跡分布調査など、今後の調査・研究に期待するところが大きい。現状において明らかになっている旧本耶馬溪町域の状況を概観する。

旧石器時代については、遺跡が確認されていない。これは、旧本耶馬溪町に限らず、山国川流域の共通した状況である。大分県内でも遺跡が集中する大野川流域などとは、大きく様相が異なる。遺跡数の粗密などは、旧石器時代の社会状況等を反映した可能性もあり、今後の資料増加を待ちたい。

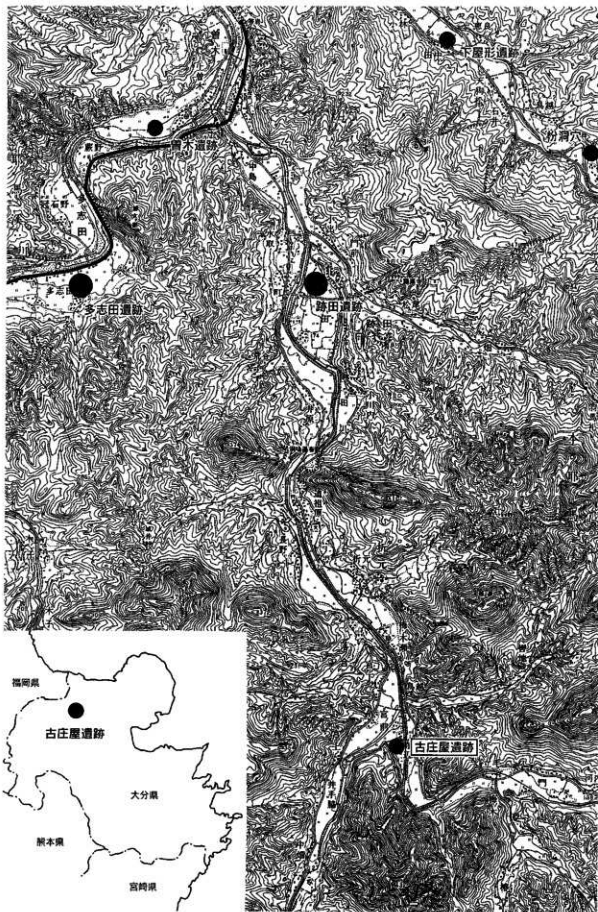
縄文時代では、山国川支流の屋形川沿いにある枡洞穴が著名である。枡洞穴は屋形川右岸に位置し、洞穴は南に向き開口している。その規模は、間口11m、奥行き9mを測る。別府大学による数次にわたる発掘調査が行われ、大きな成果が得られているが、正式報告書はいまだ刊行されていない。概要報告によると、66体の縄文時代人骨が確認されている。これは、九州の縄文時代遺跡のなかでは最大規模である。時間的には、前期、中期、後期のものがあるようで、時期ごとの埋葬状況を知ることのできる良好な例となるであろう。加えて、多くの遺物も出土しており、報告書の刊行が待たれるところである。縄文時代早期の遺物を出土する遺跡として、下屋形遺跡がある。下屋形遺跡は、枡洞穴と同じ屋形川沿いの左岸に位置する。弥生・古墳時代の遺構に混じり、早期の田村式土器が検出されている。屋形川流域では、洞穴や段丘上に小規模な遺跡が点在する状況であったことが想定される。このほかの縄文時代遺跡として、曾木遺跡と多志田遺跡がある。両遺跡とも山国川本流沿いに位置する。曾木遺跡では、ほ場整備事業に伴う試掘調査が行われたのみであるが、縄文時代後期の土器片が確認されている。また、多志田遺跡では縄文時代晩期の遺物が検出されている。

弥生・古墳時代では、下屋形遺跡において31基の竪穴住居が確認されている。遺跡は屋形川左岸に位置するので、本地域の中核的な遺跡であろう。ほ場整備事業に伴い調査されたもので、複雑に切り合う竪穴住居群が調査された。竪穴住居は、弥生時代中期から6世紀に及ぶもので、屋形川に沿いのびる溝と丘陵に挟まれた部分に集落が展開する。山国川本流沿いにも比較的広い谷底平野がみられるが、これらの部分では弥生・古墳時代の集落は確認されていない。河床の深い山国川本流沿いではなく、山国川支流の小河川沿いに弥生・古墳時代集落が形成されていたようである。

古代の遺跡は、旧本耶馬溪町内では確認されていない。

中世では、下屋形遺跡で掘立柱建物跡、土壇墓、井戸などが確認されている。土壇墓などの存在から、屋形川流域における支配層の一翼をなす屋敷跡であろうと思われる。また、井戸については、深さ1m程の素掘りのものである。数基が検出されているが、いずれも農業用の灌漑井戸であろうと思われる。灌漑用水路と思われる溝に近接して配置されており、井戸は溜井の性格を有するものと想定される。このような遺構は、段丘上など水利環境があまり良くない水田が展開する部分でみられるようで、国東半島の国東市七郎丸遺跡、杵築市八坂本庄遺跡などでも確認されている。

占庄屋遺跡は第一次調査により、ほぼ鎌倉時代全般にわたり存続した館跡であることが確認されている。館跡は、北側と南側に溝をもつ一辺1町四方の館に相当する大規模のものである。また、館南側の溝の内側では、土壇墓が溝に沿い主軸を東西にもつものと南北にもつものが交互に配置される特異な状況が確認されている。遺跡は、鎌倉時代になり入部した東国御家人一族の居館であろうと推測されている。



第1図 古庄屋遺跡と周辺の遺跡

第3章 調査の概要

古庄屋遺跡は、山国川支流の跡田川沿いに位置する。山国川は、周防灘に注ぐ下流域で広大な沖積平野を形成するが、中上流域では支流も含め山間を縫うように流れる。

跡田川は、山国川河口部から約15kmの地点で本流に合流する。その合流地点から約5km遡った場所に遺跡は位置する。跡田川は東谷を流れてくるが、遺跡が位置する場所で、西谷を下ってきた西谷川と合流する。山国川の各支流は、いずれも追る山塊を縫うように流れ、狭小な谷底平野を形成するのみである。しかし、本遺跡の所在する場所は、東谷と西谷が出会い、本地域にあつては比較的広い平坦面を形成する。東谷と西谷が出会うこの地区は、両方の谷を押さえる要衝の地といえる。

遺跡は、背後に山塊を背負い、両側を跡田川と西谷川に囲まれた位置にある。両河川とも河床は深く侵食され、その深さは約5mを測る。古庄屋遺跡は、この両河川を天然の堀とした要害の場所に立地する。

遺跡の周辺には、「古庄屋」をはじめ「浄正」、「前田」、「屋敷」、「大門堂」などの中世の景観を想起させる字名がみられる。遺跡南側の字「浄正」の地には、浄正寺という寺院が存在したという伝承が地元であり、板碑などの石造品がみられる。加えて、背後の丘陵は「ジョウヤ」と呼ばれており、城郭関係施設の存在が想定される。

今回の第二次調査では、平成12年度に実施された第一次調査区の東側、西側、北側に調査区を設定し、各調査区をⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼称する。第二次調査の調査面積は約7,300㎡で、第一次調査と併せ約10,000㎡を調査したことになる。

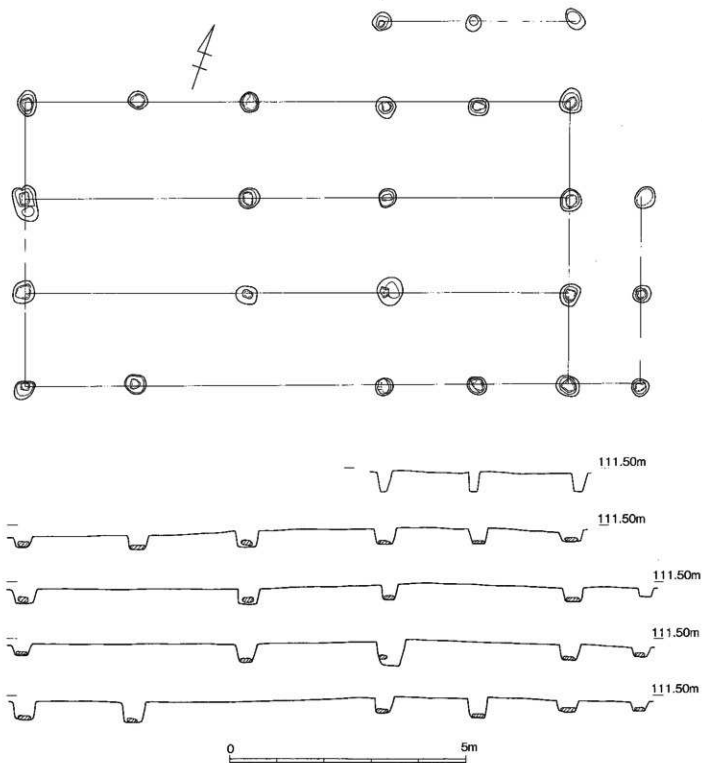
遺構は、水田床土直下ないしは床土下数10cmで検出される。Ⅰ区の東側部分とⅡ区は検出面が礫層で、困難を極めた。その他の部分は黄褐色土層面が検出面となった。今回検出した遺構は、掘立柱建物跡、土壇墓、土塀、井戸、溝などである。以下、その概要を述べる。



第2図 古庄屋遺跡と周辺の地形

1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は7棟が確認された。建物跡はいずれもⅠ区で検出されたもので、このうち建物11、建物12、建物13、建物14、建物15は、第一次調査区で検出された柱穴と併せ建物を構成するもので、調査後に図上復元した



第3図 古庄屋遺跡 建物9

ものである。

また、第一次調査で復元された10棟の掘立柱建物跡のうち、建物の大部分が調査区外に及ぶ2棟を建物9と建物10とした。これらは、第二次調査I区において建物の続きが確認されるはずであった。しかし、第二次調査の結果、想定した位置に柱穴が検出されず、建物として復元できないことが判明した。よって、第一次調査で掘立柱建物跡として報告した建物9、建物10を掘立柱建物跡から除外し、第二次調査で確認された建物について、新たに建物9から建物番号をつけた。

以下、掘立柱建物跡について概要を述べる。

(1) 建物9

建物9（第3図）は建物10と重複しており、掘立柱建物群の最も北側に位置する。黒敷地の北を向する溝6から、もっとも近い位置にある。

建物は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN82° Eである。第二次調査で検出された建物のうち、東西方向に主軸をもつのは、本建物と建物10の2棟のみである。

規模は桁行5間、梁行3間で、建物の東側と北側に各々2間分の柱穴列が付く。東側は南から2間、北側は東から2間で、部分的な庇であると思われる。

建物の柱間寸法は、南側桁行が東から2.0m+2.0m+5.2m+2.4mを測る。東側から4番目の柱穴がみられない。

次に、北側桁行は東から2.0m+2.0m+2.8m+2.4m+2.4mを測る。

また、梁行の柱間寸法は、東側梁行が南から1.9m+2.0m+2.0m、西側梁行が南から1.9m+2.0m+2.0mを測る。以上から、建物の身舎面積は68.44㎡である。

一方、庇部分については、東側が東側梁行列から1.5mの位置にあり、柱間寸法は南から1.9m+2.0mである。北側は北側桁行列から1.7mの位置にあり、東から2.1m+2.0mである。

本建物は身舎面積68.44㎡を測るもので、一般的な建物に比較するとかなり大型のものである。柱穴の配置をみると、側柱以外にも中央部に4本の柱穴を配する。また、身舎部分の柱穴すべてには、柱穴の底に径20～40cmの扁平な石が敷かれている。その多くは河原石である。これに対し、庇部分の柱穴には河原石敷きのものは少ない。

(2) 建物10

建物10（第4図）は、建物9と重複した位置にある。

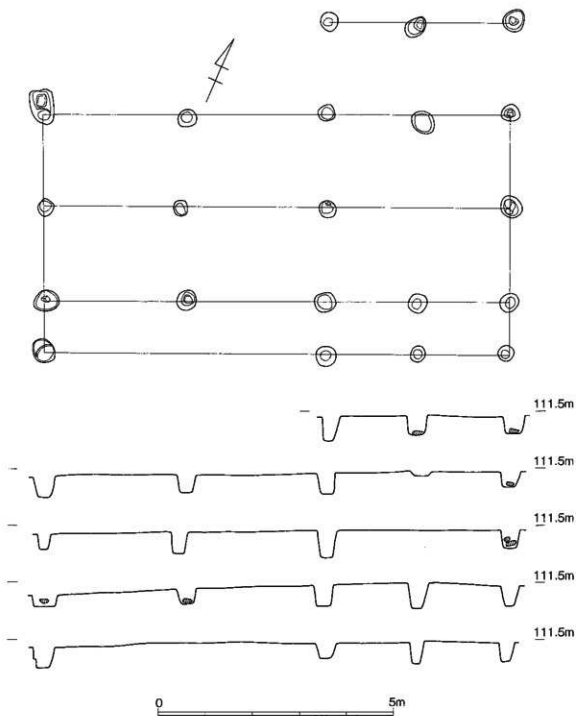
建物は、建物9と同様に東西方向に主軸をもつ建物である。主軸方位はN77° Eで、建物9とちかい方位を示す。

規模は、桁行4間、梁行2間で、南側に庇と思われる柱穴列がみられる。また、建物の北側にも2間分の柱穴列が検出されている。建物9でもみられたような部分的な庇であろう。

建物の柱間寸法をみてみると、南側桁行が東から2.0m+1.9m+3.0m+3.0m、北側桁行が東から1.9m+2.0m+3.0m+3.0mである。また、梁行は東側梁行が南から2.0m+1.9m、西側梁行が南から2.0m+1.9mを測る。以上から、建物の身舎面積は30.61㎡である。

一方、庇部分の柱間寸法は、南側の庇が南側桁行列から1.1mの距離にあり、東から2.0m+1.9m+6.0mである。北側の庇は、北側桁行列から1.9mの位置にあり、東から2.0m+1.9mを測る。

本建物は、身舎面積からみると建物9の約半分の規模である。柱穴の配置をみると、側柱以外にも身舎中央に柱穴が配されている。一部の柱穴に扁平な石を敷いたものがみられるが、大部分の柱穴には石敷きは確認できない。



第4図 古庄屋遺跡 建物10

(3) 建物11

建物11(第5図)は、建物9、建物10の南側に位置する。

建物は、第一次調査区と第二次調査区にまたがる状況で検出された。第二次調査の後、図面整理をする中で、第一次調査の図面とあわせ図上復元するかたちで確認された。

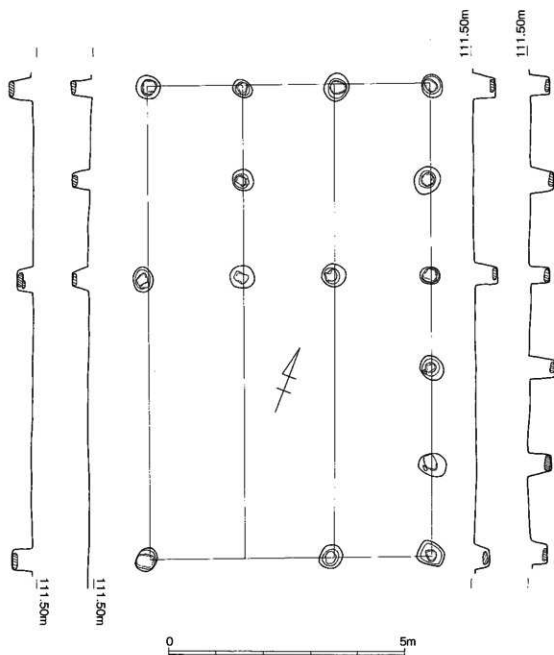
建物は、南北方向に主軸方位を有するもので、主軸方位はN21° Wである。今回の第二次調査で確認された建

物7棟のうち、南北方向に主軸を有するものは5棟である。

規模は、桁行5間、梁行3間で、庇等はみられない。柱穴は個柱部分のみでなく、身舎部分にも配置されている。

建物の柱間寸法は、東側桁行が南から1.9m+2.0m+2.0m+2.0m+2.0m、東側桁行が南から5.9m+4.0mである。また、梁行は南側梁行が東から2.1m+3.9m、北側梁行が東から2.0m+2.0m+2.0mを測る。以上から、建物の身舎面積は59.4㎡である。

本建物のもつ大きな特徴として、柱穴の底の石敷きがあげられる。すべての柱穴の底に径20~40cmの河原石がみられる。このような石敷きは、建物9でもみられた。第一次調査では、遺跡の中心的な建物と推測される建物



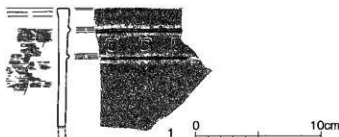
第5図 古庄屋遺跡 建物11

1で確認されている。また、建物の規模からみても、中世の一般的な建物と比べるとかなり大型であることが分かる。

建物を構成する柱穴から出土する遺物は、少量であった。そのうち、器形が分かるものについてのみを図示した(第6図)。

1は瓦質土器火鉢の口縁部である。口縁は直立し、断面方形を呈する。わずかに、内側が肥厚気味である。外面口縁下には、断面三角形の低い貼り付け突帯2条付され、突帯間に退化した雷文のスタンプ文が等間隔に施される。調整は、外面がヨコナデまたはナデによる仕上げがなされ、内面にはハケメ状工具によるナデが認められる。

時期は16世紀前半に位置付けられよう。



第6図 古庄屋遺跡 建物11 出土遺跡

(4) 建物12

建物12(第7図)は、建物11の東側に位置する。

南北方向に主軸方位をもつ建物で、同じように主軸方位を南北にもつ建物13および建物14と重複しているが、その前後関係は不明である。また、建物の主軸方位はN10°Wを測る。

建物の規模は、桁行5間、梁行2間で東側に庇が付く。柱間寸法は、東側桁行が南から2.2m+2.2m+2.0m+2.2m+2.3m、西側桁行が南から2.1m+2.3m+2.0m+2.3m+2.1mを測る。梁行は、南側梁行が東から3.1m+3.3m、北側梁行が東から2.8m+3.6mである。以上から、身舎面積は69.12㎡となる。

また、建物の東側に付く庇は、東側桁行から1.2mの位置にあり、柱間寸法は南から2.2m+2.1m+2.0m+2.2m+2.4mを測る。

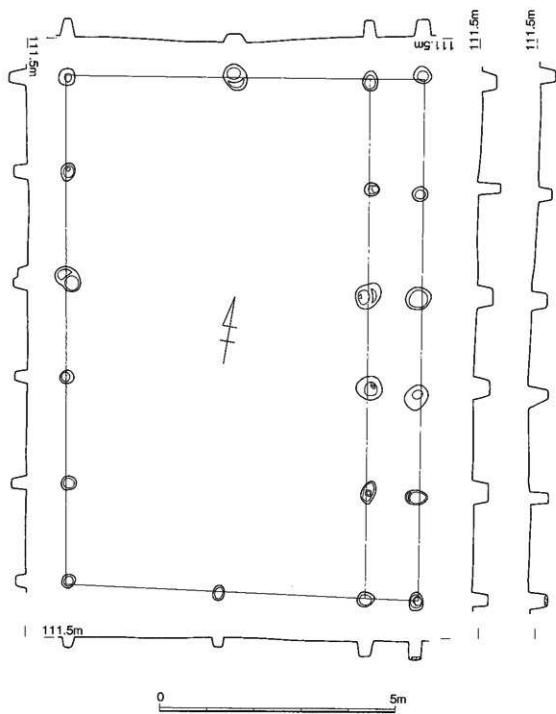
次に、建物を構成する柱穴から出土した遺物をうち、器形が分かるものについて図示(第8図)する。

2は土師質土器杯である。底径に比し器高が高い器形を呈する。法量は復元口径9.8cm、高さ3.0m、底径5.1cmを測る。同様な器形を呈する一群のなかでも、かなり小型の器形である。他に類例がみられないため、時期の比定などは躊躇される。

3、4は土師質土器小皿である。3は底部から厚みをほとんど変えず、体部に続くものである。体部は斜方向に立ち上がり、端部を丸くおさめる。法量は口径6.9cm、高さ0.8cm、底径5.4cmを測る。4は3に比べ、器高の高いものである。やや厚みをもつ平坦な底部から、厚みを減じた体部が斜方向に立ち上がる。法量は口径7.3cm、高さ1.4~1.7cm、底径4.4cmである。

5は瓦器碗で、法量は復元口径15.6cm、高さ6.4cm、復元底径7.2cmを測る。器形は、体部の下部でいったん折れて、そのまま口縁にいたる。体部外面はユビオサエのみで、内面にわずかにヘラミガキが残る。

以上から、本建物の時期は13世紀後半に位置付けられる。



第7図 古庄屋遺跡 建物12



第8図 古庄屋遺跡 建物12 出土遺物

(5) 建物13

建物13(第9図)は、建物12、建物14と重複した位置にある。

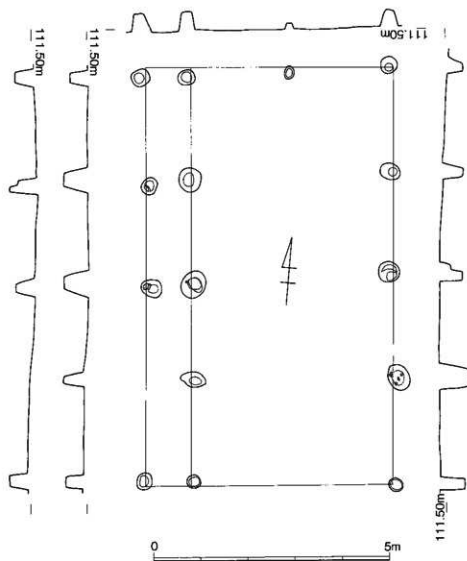
建物は南北方向に主軸方位をもつもので、同様に南北方向に主軸を有して重複する建物12、建物14との前後関係は不明である。主軸方位は $N6^{\circ}W$ である。

建物の規模は桁行4間、梁行2間で、西側に庇が付される。柱間寸法は、東側桁行で南から $2.3m+2.1m+2.1m+2.2m$ 、西側桁行で南から $2.3m+2.1m+2.1m+2.2m$ を測る。梁行は南側梁行が1間のみで $4.3m$ 、北側梁行が東から $2.2m+2.1m$ である。以上から、身舎面積は $37.41m^2$ である。

また、建物の西側に付く庇は、西側桁行から $1.0m$ の位置にあり、その柱間寸法は南から $4.2m+2.1m+2.3m$ を測る。

本建物は、身舎面積が $37.41m^2$ と遺跡のなかでは小型の建物といえる。しかし、中世の一般的な掘立柱建物からみれば、やや大きめの範疇にはいるものである。建物の規模からみても、本遺跡が中世の一般集落とは隔絶したものであることが分る。

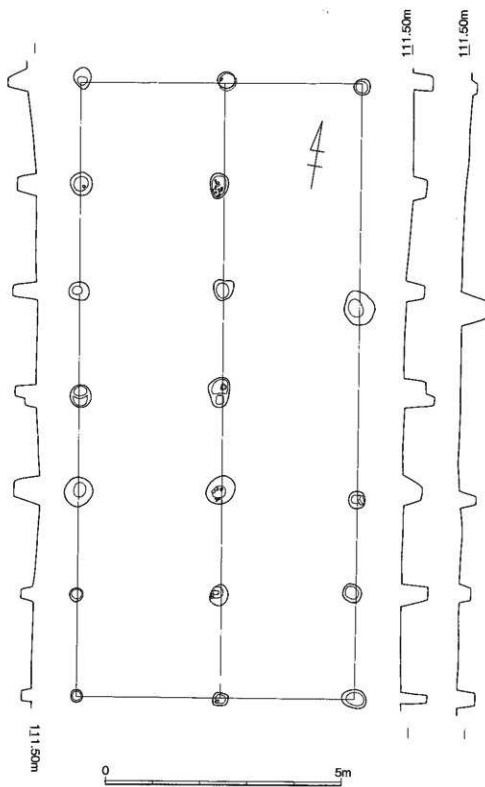
建物を構成する柱穴からは、図示可能な遺物が出土しておらず、時期は不明である。



第9図 古庄屋遺跡 建物13

(6) 建物14

建物14 (第10図) は、建物12、建物13と重複した位置にある。



第10図 古庄屋遺跡 建物14

建物は南北方向に主軸をもつもので、他の建物に比べやや細長い感じを受ける。建物の主軸方位はN8°Wである。

建物の規模は、桁行6間、梁行2間である。柱穴は側柱ばかりでなく、総柱状に身舎中にもみられる。しかし、東側桁行の南から4番目と6番目の柱穴がみられない。

柱間寸法は、東側桁行で南から2.2m+2.0m+4.1m+4.6m、西側桁行で南から2.1m+2.2m+2.1m+2.1m+2.2m+2.2mを測る。また、梁行は南側梁行で東から2.9m+3.0m、北側梁行で東から2.9m+3.0mである。以上から、本建物の身舎面積は76.11㎡である。

本建物は、第二次調査で確認された7棟のなかでは最も規模が大きいものである。また、第一次調査の分とあわせても、身舎面積79.36㎡の建物1に次ぐ規模である。

建物を構成する柱穴から出土した遺物のうち、図示できるものを紹介する(第11図)。

6は土師質土器杯である。器高の不高くない一群で、復元口径10.8cm、高さ2.4cm、底径7.0cmを測る。7は土師質土器小皿である。底部と同じ厚みを持ち、体部が斜めに引き上げられる。口径7.1cm、高さ1.0~1.1cm、底径5.1cmを測る。8は瓦器碗底部である。本建物の時期は13世紀後半に位置付けられる。



第11図 古庄屋遺跡 建物14 出土遺物

(7) 建物15

建物15(第12図)は、建物14の東側に位置する。建物13、建物14と重複しており、その前後関係は不明である。

建物は、南北方向に主軸方位をもつもので、主軸方位はN5°Wである。

建物の規模は、桁行5間、梁行3間であるが、梁行のうち南側は2間である。また、東側と西側に庇が付き、両面庇の建物となる。

柱間寸法は、東側桁行が南から2.0m+2.2m+2.2m+1.8m+2.2m、西側桁行が南から2.0m+2.2m+2.0m+1.7+2.5mである。また、梁行は南側梁行が東から2.2m+2.4m、北側梁行が東から1.5m+1.8m+1.3mである。以上から、本建物の身舎面積は47.84㎡である。

庇部分の柱間寸法をみてもみる。東側の庇は、東側桁行から1.2mの位置にあり、南から2.0m+2.2m+1.9m+2.2m+2.1mである。西側の庇は、東側よりやや近く西側桁行から1.0mの位置にある。柱間寸法は、南から2.0m+2.2m+2.0m+1.4m+2.8mである。

建物を構成する柱穴から出土した遺物のうち、図示できるものを紹介する(第13図)。

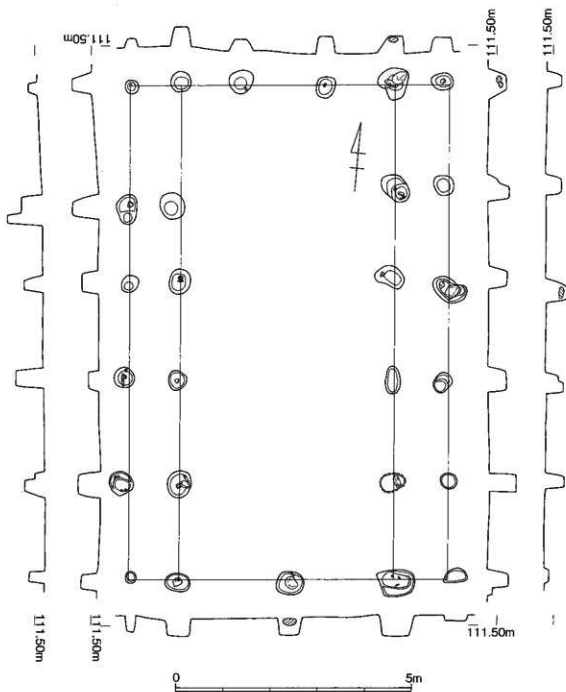
9は土師質土器杯である。器高の低いタイプのもので、復元口径12.0cm、高さ2.4cm、復元底径8.4cmである。

10~14は土師質土器小皿である。このうち10~12は体部が斜方向に立ち上がるものである。10は厚い底部から薄い体部が引き上げられる。復元口径7.2cm、高さ1.2cm、底径5.2cmである。11は体部が底部と同じ厚みをもつもので、口径7.4cm、高さ1.0cm、底径4.5cmである。12は口縁端部がやや尖り気味である。口径8.0cm、高さ1.1~1.2cm、底径6.1cmを測る。13は厚い底部から、薄い体部が内湾気味に立ち上がるものである。口径7.4cm、高さ2.1cm、底径4.8cmである。14は、底部と同じ厚みを持ち体部が緩やかに立ち上がり、口縁にいたるものである。口

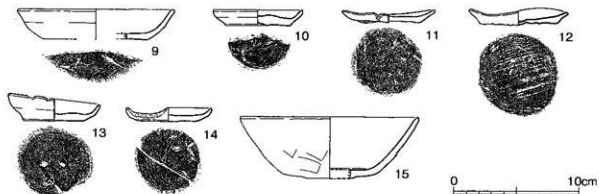
径6.9cm、高さ1.0～1.1cm、底径5.0cmを測る。

15は瓦器碗である。破片のため不明であるが、高台が退化しているか、消失したものであろう。

以上の遺物は、13世紀から14世紀のものがみられる。これらから、本建物の時期は14世紀代に位置付けられるであろう。



第12図 古庄屋遺跡 建物15



第13図 古庄屋遺跡 建物15 出土遺物

2 土 墳 墓

第二次調査では、土墳墓が19基確認された。このうち16基はⅠ区から、3基はⅡ区に位置する。

Ⅰ区の16基はいずれも、溝6の南側に溝と平行するように分布する（付図参照）。土墳墓列と溝6の距離は約5mで、その間には比較的遺構が少ない。溝6の埋土の状況から、溝と土墳墓列の間に土壘が存在したものと考えられる。土墳墓列の土墳墓は、主軸を南北方向にとるものと、東西方向にとるものが交互に配されている。このような状況は、第一次調査での際に、館の南側の区画施設である溝1の内側でも確認されている。すなわち、館の南北を区画する各々の溝に沿い主軸方位を異にする土墳墓を交互に配するという、極めて興味深い状況であることが分かった。

以下、個別の土墳墓についてみていく。

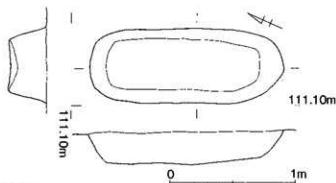
(1) 土墳墓9

土墳墓9（第14図）は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN23°Wである。

平面プランは長方形基調を呈するが、かなり丸みをもつ形態をなす。規模は、長さ1.55m、幅0.6m、深さ0.2～0.25mを測る。

床面は比較的平坦であるが、南に向かい緩やかに高くなる。また、床面からの壁の立上りは、それほど急ではない。

土墳墓内から、人骨はまったく確認されず、副葬品と思われる遺物も検出されなかった。また、埋土の土層観察を行いながら掘り下げを行ったが、木棺の痕跡は確認することはできず、鉄釘等も検出されなかった。木棺等は使用されず、直葬であった可能性が高い。



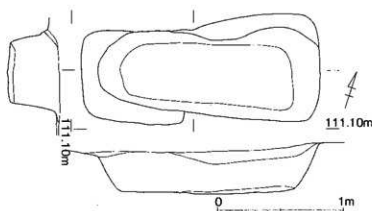
第14図 古庄屋遺跡 土墳墓9

(2) 土墳墓10

土墳墓10（第15図）は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN76° Eである。

長方形基調の平面プランを呈するが、西側についてはかなり丸みをもつ。規模は、長さ1.6m、幅0.55～0.7m、深さ0.3～0.35mを測る。幅は、西側に比べ東側は0.1cm程広い。あえて想定するならば、墓位が東であった可能性が高い。

土墳墓内の埋土については、土層観察を行いながら掘り下げを行ったが、木棺の痕跡は確認されなかった。また、人骨、副葬品等も検出されなかった。



第15図 古庄屋遺跡 土墳墓10

(3) 土墳墓11

土墳墓11（第16図）は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN28° Wである。

平面プランは長方形基調を呈するが、かなり丸みをもつ形態をなす。特に、北側は楕円形を呈する。規模は、長さ1.8m、幅0.6～0.65m、深さ0.2～0.3mを測る。

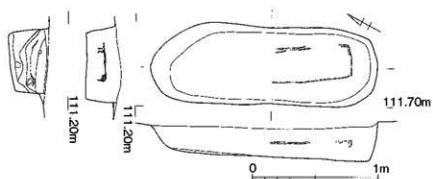
床面は比較的平坦であるが、北から南に向かい傾斜して深くなる。また、床面からの壁の立上がりは、北側が比較的緩やかであるが、他は直立気味に立つ。

土墳墓内は、土層観察を行いながら慎重に掘り下げを行った。その結果、薄い黒褐色の層が確認された。この層は炭化物状のもので、土墳墓内南半でコの字状の平面プランを検出した。土層図をみると、この層は埋土中程にみられ、明確ではないがレンズ状に堆積している。そして、この層は床面まで及ばない。これは木棺の痕跡である可能性をもつが、床面まで及ばないことから、棺ではなく蓋であったことも考えられる。

また、土墳墓内からは人骨や副葬品と思われる遺物は検出されなかった。

土墳墓内からわずかに遺物が出土したが、それらのうち器形を復元できたものを紹介する（第17図）。

16は土師質土器小皿である。体部は、底部と同様な厚みもちながら斜方向に立ち上がる。その立ち上がりは、比較的シャープである。分量は、復元口径7.2cm、高さ1.05cm、復元底径5.0cmである。時期的には、13世紀中～後半に比定される。



第16図 古庄屋遺跡 土墳墓11



第17図 古庄屋遺跡 土墳墓11 出土遺物

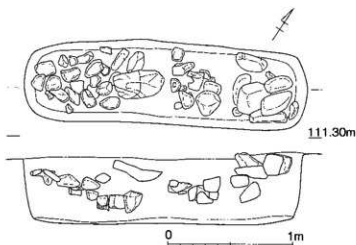
(4) 土墳墓12

土墳墓12(第18図)は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN57° Eである。

平面プランは、細長い長方形基調を呈する。規模は、長さ2.25m、幅0.6~0.65m、深さ0.5mを測る。床面は平坦で、壁の立上がりは垂直気味である。土墳墓内には0.1~0.4mの礫が多数みられ、上層から中層にかけて堆積している。これらは、本米土墳墓上に置かれていものが落ち込んだものであろう。

土墳墓内からは人骨や副葬品は検出されず、木棺等の痕跡も確認されなかった。

出土遺物(第19図)のうち、17は土師質土器小皿である。復元口径7.9cm、高さ1.15cm、復元底径5.2cmを測る。13世紀代に位置付けられるものである。



第18図 古庄屋遺跡 土墳墓12



第19図 古庄屋遺跡 土墳墓12 出土遺物

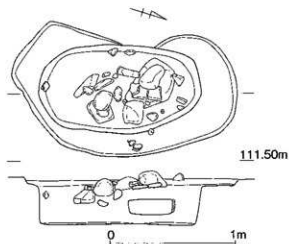
(5) 土墳墓13

土墳墓13（第20図）は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN16° Wである。

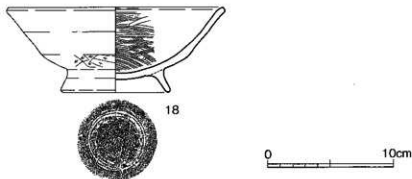
土墳墓の平面形態は楕円形を呈する。土墳墓の周囲に深さ0.05mの浅い不定形の掘り込みがみられるが、土墳墓本体との関係は不明である。土墳墓の規模は、長さ1.3m、最大幅0.7m、深さ0.25mを測る。床面は平坦で、壁も垂直気味に立ち上がる。

土墳墓内の上層から中層にかけては、0.05～0.4mの隙がみられる。このうち、大型の隙は数個である。これらは、本来土墳墓上に置かれていたものが落ち込んでいたものであろう。土墳墓内からは、人骨や副葬品は検出されなかった。

出土遺物（第21図）のうち、18は内黒土器碗で、土墳墓周囲の浅い落ち込みから出土した。9世紀後半～10世紀にかかるものか。



第20図 古庄屋遺跡 土墳墓13



第21図 古庄屋遺跡 土墳墓13 出土遺物

(6) 土墳墓14

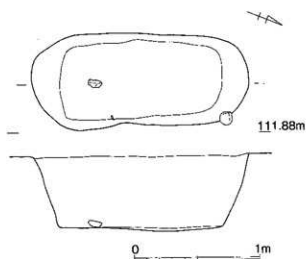
土墳墓14(第22図)は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN21°Wである。

平面形態は、丸みをもつ長方形基調を呈する。土墳墓の規模は、長さ1.75m、幅0.7~0.75m、深さ0.6mを測るもので、やや深めである。床面は平坦で、壁も垂直気味に立ち上がる。

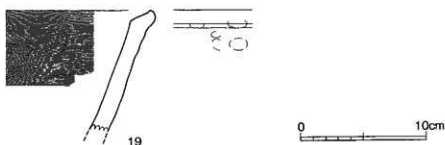
土墳墓内の埋土は、土層観察を行いながら慎重に掘り下げた。その結果、木棺の痕跡等は確認することができなかった。土層堆積状況からみても、直葬であった可能性が高い。また、土墳墓内からは人骨や副葬品は検出されなかった。

土墳墓内から出土した遺物のうち、器形の分るものを紹介する(第23図)。

19は土鍋である。体部が直線的に伸び、口縁部が外方にわずかに折れる。外面はナアとユビオサエ、内面は横方向のハケメが施される。14世紀初前後のものか。



第22図 古庄屋遺跡 土墳墓14



第23図 古庄屋遺跡 土墳墓14 出土遺物

(7) 土墳墓15

土墳墓15(第24図)は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN58°Eである。

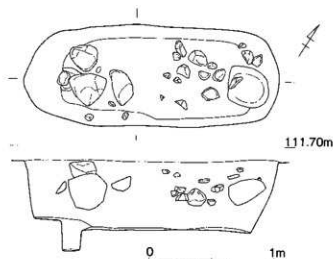
平面プランは長方形基調で、丸みをもつ。規模は、長さ2.05m、幅0.7~0.8m、深さ0.45~0.55mを測る。他に比べ長さがやや長い。

床面には、深さ約0.2mの柱穴状のものがみられる。床面は平坦であるが、柱穴状のものを境に0.1mほど深さが異なる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直気味である。

土墳墓内からは、0.05～0.3mの礫が多数検出されている。いずれも上層から中層にあり、両端付近の2ヶ所に分れてみられる。これらは、本来土墳墓上に置かれていたものと思われるが、その後落ち込んだものと推測される。

土墳墓内の埋土については、土層観察を行いながら慎重に掘り下げた。しかし、木棺の痕跡等は確認することができなかった。また、人骨や副葬品も検出されなかった。

出土遺物のうち、器形が復元できたものを図示する(第25図)。20は土師質土器杯である。器高の高い一群で、復元口径12.2cmを測る。13世紀後半以降のものである。



第24図 古庄屋遺跡 土墳墓15



第25図 古庄屋遺跡 土墳墓15 出土遺物

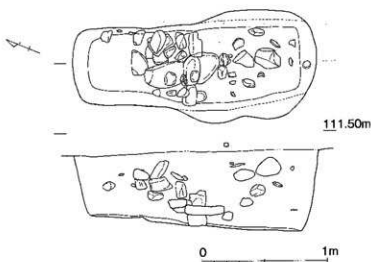
(8) 土墳墓16

土墳墓16(第26図)は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN24°Wである。

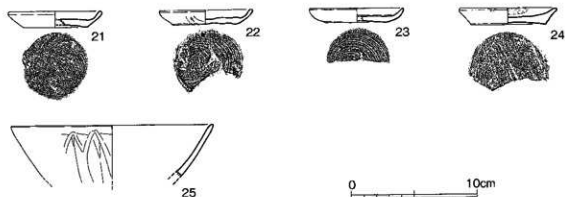
一部でやや崩壊している部分があるものの、平面形態は長方形基調を呈するものと思われる。規模は、長さ1.95m、幅0.6～0.85m、深さ0.5～0.65mを測る。床面は平坦であるが、北から南に向かい傾斜している。

土墳墓内の上層から下層にかけては、0.05～0.35mの礫が多数みられるが、人骨や副葬品については確認されなかった。

出土遺物(第27図)には、土師質土器と青磁がある。21～24は土師質土器小皿である。22、23は、内湾気味の体部をもつもので、体部の立ち上がりは緩やかである。22は復元口径7.5cm、高さ1.1cm、底径5.1cm、23は復元口径7.6cm、高さ1.1cm、底径5.0cmである。21、24は体部が斜方向にシャープに立ち上がるものである。24は、口縁端部が尖り気味である。21は復元口径7.4cm、高さ1.25cm、底径5.1cm、24は復元口径7.6cm、高さ1.3cm、底径6.0cmである。25は鎬蓮弁文をもつ青磁碗である。以上は、13世紀中葉ころのものか。



第26図 古庄屋遺跡 土墳墓16



第27図 古庄屋遺跡 土墳墓16 出土遺物

(9) 土墳墓17

土墳墓17(第28図)は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N77^{\circ}E$ である。

土墳墓の平面プランは、やや丸みをもつものの長方形基調を呈する。規模は、長さ2.2m、幅0.65~0.75m、深さ0.6~0.65mを測る。長さは、他に比べやや長めである。また、床面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直気味である。

土墳墓内の中層から下層にかけては、0.05~0.4mの礫がみられる。これらは、本来土墳墓上に置かれていたものと思われる。

土墳墓内は、土層観察を行いながら慎重に掘り下げを行った。その結果、土墳墓11でみられたような薄い黒褐色の層が確認された。この層は炭化物状のもので、一部で長方形にちかい平面プランを検出した。土層図をみると、この層は埋土中層から下層にかけてみられ、明確ではないがレンズ状に堆積している。そして、この層は床面まで及ばない。不明な点も多いが、これは木棺に関連するものの痕跡である可能性が考えられる。

また、土墳墓内からは人骨検出されなかった。副葬品について、床面ではまったく確認されなかったが、後述するように完形の紙石が出土している。土墳墓中あるいは上面に供えられたものであるかもしれない。

土墳墓内からの出土遺物(第29、30図)のうち、26、27は土師質土器である。両者とも底径に比して、器高の高いものである。26は復元口径11.8cm、高さ3.5cm、底径4.8cmを測るもので、体部はやや内汚気味である。27

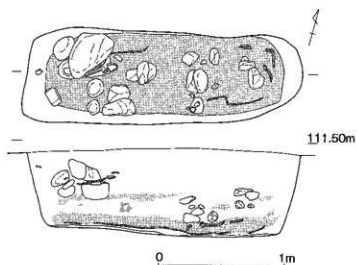
は底部資料で、底径5.9cmである。

28~30は瓦器碗である。28は全形が分るもので、復元口径14.7cm、高さ5.1cm、底径5.1cmを測る。ヘラミガキはみられず、外面下半にユビオサエが残る。高台は退化傾向がうかがえ、径も縮小している。29、30は底部を欠くが、28と同様な特徴をもつ。

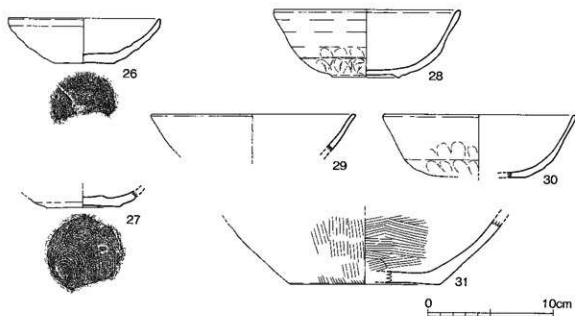
31は鉢である。内外面にハケメがみられる。

32は輝緑凝灰岩製砥石である。長さ17.5cm、幅2.6~3.1cm、厚さ1.3~1.6cmで、長軸に沿った溝状の凹みがある。

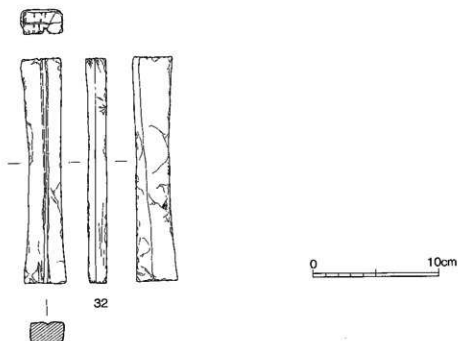
以上の遺物は、14世紀前葉のものか。



第28図 古庄屋遺跡 土墳墓17



第29図 古庄屋遺跡 土墳墓17 出土遺物1



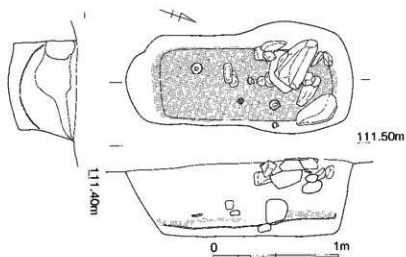
第30図 古庄屋遺跡 土墳墓17 出土遺物2

00) 土墳墓18

土墳墓18 (第31図) は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN20° Wである。

平面形態は長方形基調を呈するものと思われるが、一部で乱れがみられる。規模は、長さ1.8m、幅0.7~0.9m、深さ0.5~0.6mを測る。床面は平坦である。また、壁の立ち上がりは、ほぼ垂直気味の部分とやや緩やかな部分がある。土墳墓内の上層と下層には、0.1~0.45mの礫がみられる。これらは、本来土墳墓上に覆かれていたものと思われる。

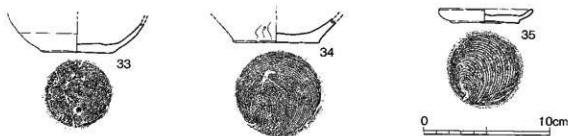
また、下層ちかくで、土墳墓11、土墳墓17でみられたような薄い黒褐色の層が確認された。この層は炭化物状のもので、土層図をみるとこの層は埴土中層から下層にかけてレンズ状に堆積している。そして、この層は床面



第31図 古庄屋遺跡 土墳墓18

まで及ばない。不明な点も多いが、これは木棺に関連するものの痕跡である可能性が考えられる。

出土遺物（第32図）のうち、33、34は土師質土器坏である。いずれも口縁部を欠くものである。33は体部が内湾気味であるのに対し、34は直線的である。35は土師質土器小皿で、口径7.4cm、高さ1.1cm、底径5.7cmを測る。以上は、13世紀後半のものか。



第32図 古庄屋遺跡 土墳墓18 出土遺物

(1) 土墳墓19

土墳墓19（第33図）は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N65^{\circ} E$ である。

平面プランは長方形基調を呈する。規模は、長さ2.0m、幅0.7～0.85m、深さ0.55mを測る。床面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

土墳墓内の上層から中層には、0.2～0.6mの礫がみられる。これらは、本来土墳墓上に置かれていたものと思われる。

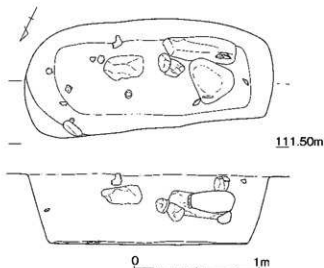
土墳内の埋土については、土層観察を行いながら掘り下げたが、木棺などの痕跡は確認されなかった。また、人骨や副葬品も検出されなかった。

出土遺物（第34図）のうち、36、37は土師質土器坏である。両者とも底径に比し器高の高い一群である。36は底径5.4cm、37は底径5.8cmである。

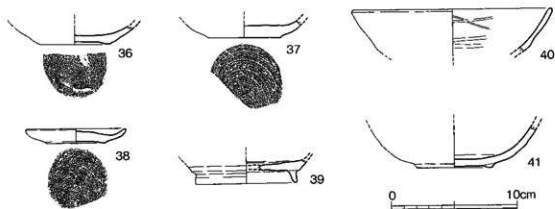
38は土師質土器小皿で、厚い底部から薄い体部が立ち上がる。復元口径8.0cm、高さ1.1cm、底径4.7cm。

39は高台付きの碗。40、41は瓦器碗である。40は内面にヘラミガキが残る。

以上のうち、39は9世紀代に、その他は13世紀代に位置付けられる。



第33図 古庄屋遺跡 土墳墓19



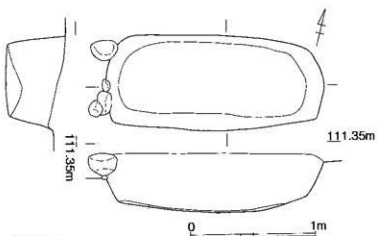
第34図 古庄屋遺跡 土壌墓19 出土遺物

⑫ 土壌墓20

土壌墓20(第35図)は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N80^{\circ}E$ である。

平面形態は長方形基調を呈するが、やや丸みをもつ。規模は、長さ1.75m、幅0.6~0.7m、深さ0.35~0.45mを測る。床面は平坦ではなく、中央が緩やかに凹んでいる。床面の高低差は、最大0.1mである。壁は垂直気味に立ち上がる。

西側の土壌墓縁に0.1~0.25mの礫がみられる。本土壌墓は、東側に比べ西側の方がわずかに幅が広がっている。幅の広い西側が頭位だとすれば、これらの礫もこれに関連するものであろうか。土壌墓内からは、人骨や副葬品は検出されなかった。



第35図 古庄屋遺跡 土壌墓20

⑬ 土壌墓21

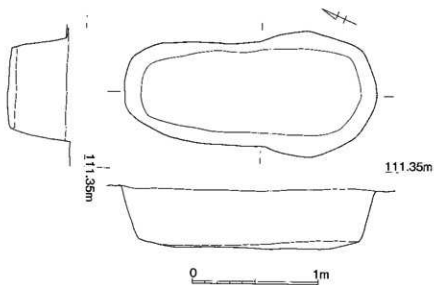
土壌墓21(第36図)は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N23^{\circ}W$ である。

平面プランは、やや不定形気味で丸みをもつが、長方形基調を呈する。規模は、長さ2.0m、幅0.7~1.0m、深さ0.4~0.45mを測る。

床面はほぼ平坦であるが、北側から南側に向かい緩やかにわずかに傾斜する。壁は、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

また、本土墳墓は、北側に比べ南側の方がわずかに幅が広がっている。幅の広い方が頭位だとすれば、南側が頭位ということになる。

土墳墓内からは、人骨や副葬品は確認されなかった。



第36図 古庄屋遺跡 土墳墓21

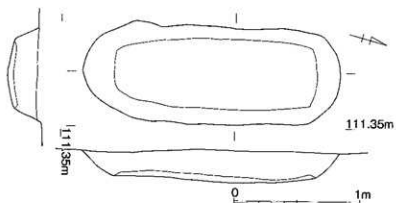
④ 上墳墓22

土墳墓22（第37図）は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN15° Wである。

平面プランは長方形基調を呈するが、やや丸みをもつ。規模は、長さ2.05m、幅0.75m、深さ0.2～0.25mを測る。

床面は、ほぼ平坦である。また、壁の立上がりについては、北側と南側が比較的緩やかであるが、両側辺はそれに比べると急である。

土墳墓内からは、人骨や副葬品は確認されなかった。



第37図 古庄屋遺跡 土墳墓22

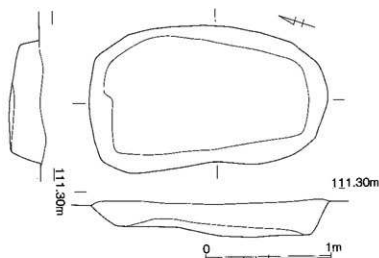
(5) 土墳墓23

土墳墓23 (第38図) は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN17° Wである。

土墳墓の平面形態は長方形基調を呈するが、やや丸みをもつ。規模は、長さ1.9m、幅0.8~1.0m、深さ0.2~0.25mを測る。

床面は、波打つように緩やかな凹凸がみられる。また、北側から南側に向かい、緩やかに傾斜している。壁の立ち上がりは、一部で緩やかな部分がある。

本土墳墓は、南側に比べ北側の方がわずかに幅が広がっている。幅の広い方が頭位だとすれば、北側が頭位ということになる。



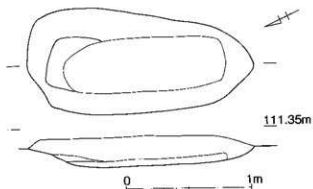
第38図 古庄屋遺跡 土墳墓23

(6) 土墳墓24

土墳墓24 (第39図) は、南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN25° Eである。

土墳墓の平面プランは、やや不定形気味の長楕円形である。規模は、長さ1.8m、幅0.6~0.8m、深さ0.2~0.25mを測る。

床面は、平坦ではなく緩やかに中央部が凹み気味である。また、壁の立ち上がりも明瞭ではなく、場所によっては床面がそのまま延び上がる。



第39図 古庄屋遺跡 土墳墓24

土壌内の埋土については、土層観察を行いながら掘り下げたが、木棺などの痕跡は確認されなかった。また、人骨や副葬品も検出されなかった。

本土壌墓は、他の土壌墓に比べて平面形態や掘り方が雑なようである。

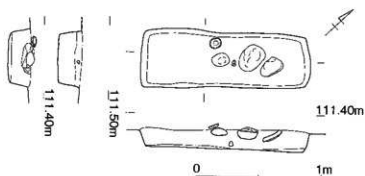
07 土壌墓25

土壌墓25（第40図）は、Ⅱ区に位置する。Ⅱ区では、第一次調査やⅠ区でみられたように、連続して配置されることはない。

東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N47^{\circ}E$ である。土壌墓の平面形態は長方形で、規模は、長さ1.35m、幅0.4～0.45m、深さ0.15mを測る。

土壌墓の中央付近には、径0.15～0.25mの鏝がみられる。いずれも上層にあり、本来は土壌墓の上に置かれていたものが落ち込んだものであろう。

土壌内の埋土については、土層観察を行いながら掘り下げたが、木棺などの痕跡は確認されなかった。

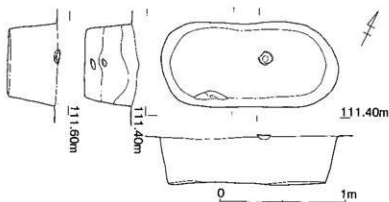


第40図 古庄屋遺跡 土壌墓25

08 土壌墓26

土壌墓26（第41図）は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N67^{\circ}E$ である。土壌墓25、土壌墓27と同じくⅡ区に位置する。

土壌墓の平面プランは、長い楕円形基調を呈するものである。規模は、長さ1.4m、幅0.65m、深さ0.35mを測る。



第41図 古庄屋遺跡 土壌墓26

床面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

土壌内の埋土については、土層観察を行いながら慎重に掘り下げたが、木棺などの痕跡は確認することができなかった。また、人骨や副葬品についても出土していない。

本土壌墓は、比較的整然と掘られており、土層観察などから直葬であった可能性が高い。

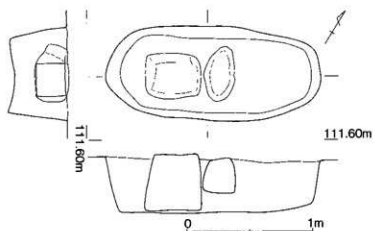
09 土壌墓27

土壌墓27（第42図）は、東西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN60° Eである。

土壌墓の平面形態は長方形基調を呈するが、やや丸みをもつ。規模は、長さ1.7m、幅0.6～0.75m、深さ0.35～0.45mを測る。

床面はほぼ平坦に仕上げられており、壁も垂直に立ち上がる。

土壌墓内の中央部から西側にかけて、大きな石が2個みられる。大きな方は、長さ0.4m、幅0.45m、深さ0.45mを測り、床面にのっている。土壌墓上に置かれていたものが、その後沈み込んだと考えるには無理がある。また、土壌墓内からは、人骨や副葬品と思われる遺物も出土していないことから、本遺構は土壌墓ではない可能性もある。



第42図 古庄屋遺跡 土壌墓27

3 土 壌

第二次調査では、I区、II区、III区の各調査区から大小の土壌が検出された。そのうち主要な土壌についての概要を以下で述べる。

(1) 土壌51

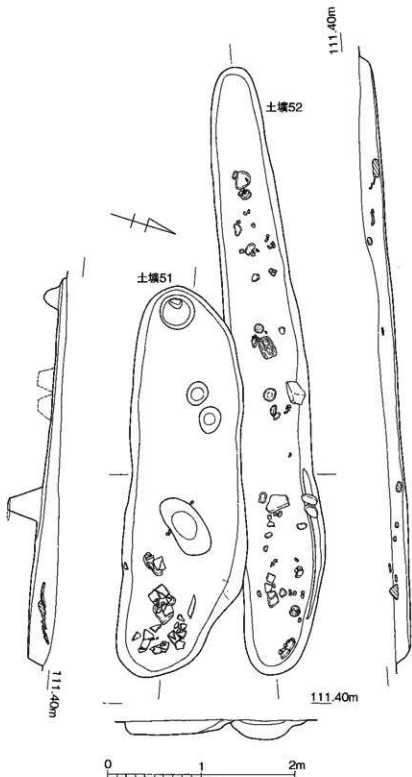
土壌51（第43図）は、土壌52と重複している。両者は並ぶように位置するが、わずかに接するように切り合い、土壌51が土壌52を切る。

土壌の平面プランは、不定形気味の長楕円形を呈する。その規模は、長さ4.1m、幅1.0～1.3m、深さ0.1～0.3m

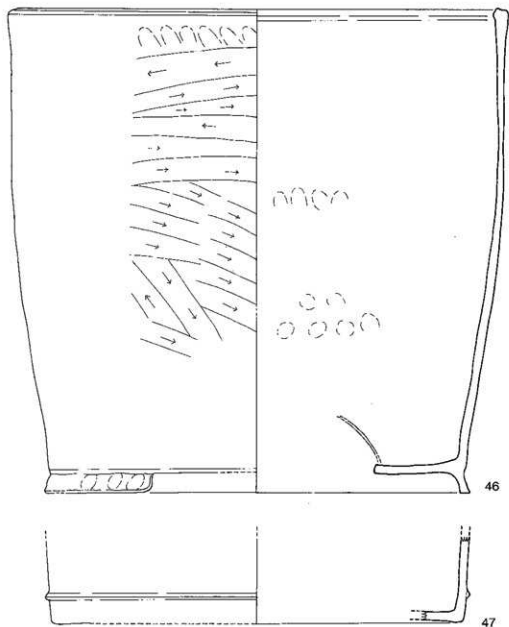
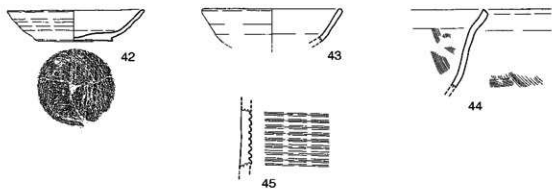
である。床面は比較的平坦で、柱穴がいくつかみられる。これらの柱穴とは切り合い関係にあると思われるが、その前後関係は不明である。

土壌内からは、多くの土器片などが出土した。これらは上層から中層にかけて出土しており、土壌が中程まで埋没した段階で廃棄されたものであろう。

出土遺物（第44図）には、土師質土器、白磁、土鍋、瓦質土器火鉢などがある。



第43図 古庄屋遺跡 土壌51 土壌52



0 10cm

第44図 古庄屋遺跡 土壘51 出土遺物

42は土師質土器である。底部の切り離しは糸切りで、板状圧痕が残る。底部はやや厚めで、円盤高台状に底部からいったん数mm立ち上がる。その後内湾気味の体部が立ち上がり、口縁にいたる。口縁端部は丸く仕上げられ、調整の際のヨコナデによりわずかに外方に引き出される。体部外面には、強いナデ痕が残る。法量は、口径10.45～11.0cm、高さ2.5cm、底径6.1cmを測る。

43は白磁碗と思われる。口縁部の資料で、復元口径は11.2cmを測る。体部下半までは内湾気味で、中程から直線的に口縁にいたる。内外面に透明釉が施される。

44は土鍋である。小破片のため口径等は復元できないが、体部は下半が丸底状になり、上半が直線的に口縁へのびる。口縁下で外方に折れ、内湾気味に口縁端部にいたる。この部分はやや肥厚しており、端部は上方へ引き上げ気味である。調整は、口縁部内外面がヨコナデで、体部には内外面にハケメがみられる。外面が横方向と縦方向、内面が縦方向のハケメである。

45～47は瓦質土器火鉢である。45は体部の小破片で、外面には断面が板状を呈する平行沈線文が施される。このような火鉢は、県内のいくつかの遺跡で確認されているが、量的にまとまって出土することはない。46は全形が復元された資料である。復元口径38.0cm、高さ38.0cm、復元底径33.0cmである。体部は直線的のびて口縁にいたる。口縁端部は内側が肥厚する。底部は高台状の脚が付される。47は底部ちかくの資料である。

以上は、16世紀前半に比定される。

(2) 土壙52

土壙52(第43図)は土壙51により切られるが、重複部分のごくわずかで、両土壙が接するようにみられる。

本土壙は、溝状に細長いもので、ほぼ直線的のびる。規模は、長さ6.4m、幅0.6～0.9m、深さ0.15～0.25mである。細長い土壙にもかかわらず、床面は平坦である。土壙内からは、土器片や礫が出土した。土器のなかには、完形にちかきものもある。

出土遺物(第45図)には、土師質土器鉢、小皿、瓦質土器土鍋などがある。

48～57は土師質土器である。このうち48～50は、体部が底部から直線的のびる一群である。48、49は外面に強いナデ痕を残し、口縁端部を丸く仕上げるものである。48は復元口径12.2cm、高さ2.35cm、復元底径8.9cm、49は口径11.8cm、高さ2.1cm、復元底径8.1cmである。50は、底部が円盤高台状を呈し、口縁端部はやや肥厚し面をなす。法量は、復元口径12.0cm、高さ2.4cm、復元底径8.0cmである。

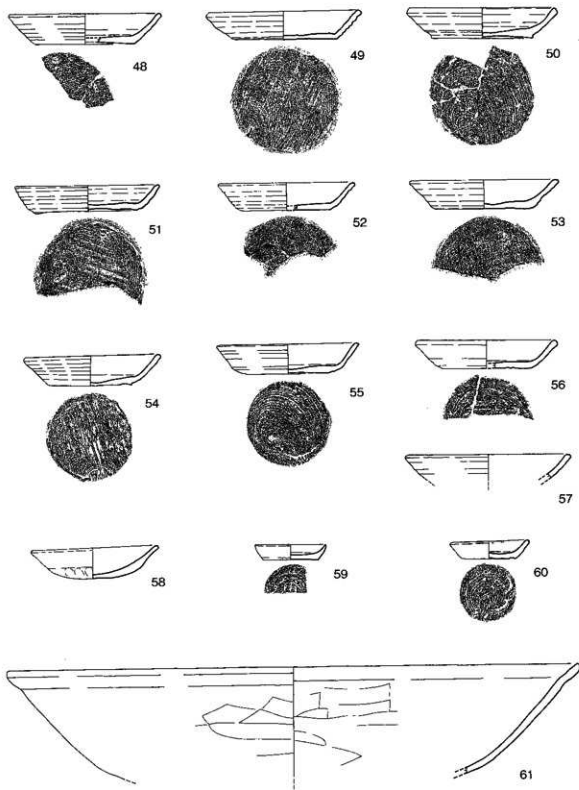
51～56は体部の立ち上がり部が、丸みをもつものである。これらの体部外面には、強いナデ痕が残る。51は最も器高が低いものである。口縁端部は尖り気味である。口径11.5cm、高さ2.0cm、復元底径8.2cmを測る。52は口縁端部を丸くおさめる。復元口径10.6cm、高さ2.2cm、復元底径6.6cmである。53は強いナデのため、体部中程がやや凹み気味になる。口径11.6cm、高さ2.3cm、復元底径7.6cmである。54は口径10.9cm、高さ2.6cm、底径6.6cmを測る。55も体部中程が強いナデのためやや凹み気味である。法量は、復元口径11.4cm、高さ2.3cm、底径6.5cmである。56は口縁端部がやや肥厚し面をなす。復元口径11.3cm、高さ3.2cm、復元底径7.0cmを測る。57は口縁部のみの資料である。やはり外面に強いナデ痕がみられる。復元口径は13.2cmである。

58も土師質土器であるが、底部に糸切りがみられないものである。色割も灰褐色を呈し、他の糸切りの坏とは明らかに異なる。底部は丸底状を呈し、体部中程から口縁部にかけては、やや強めのナデにより反外気味である。体部下半にはユビオサエが残る。法量は口径10.2cm、高さ2.5cmである。

59、60は土師質土器小皿である。59は、体部が内湾気味で口縁端部が尖る。復元口径5.7cm、高さ1.2cm、復元底径4.4cmである。53は体部が斜め方向ののびる。口径6.3cm、高さ1.4cm、底径4.3cmである。

61は瓦質土器土鍋である。復元口径45.4cmを測る大型品である。口径に比し器高は低く、浅い器形をなす。口縁下を強くナデ、口縁はわずかに外方に折れる。体部外面にはヘラケズリがみられる。

以上は、16世紀前半に位置付けられる。



第45図 古庄屋遺跡 土壇52 出土遺物

(3)土壌53

土壌53(第46図)は不定形を呈するものであるが、一部を他の遺構により切られる。その規模は、長さ2.35m、幅0.9~1.2m、深さ0.1~0.25mである。

床面は比較的平坦であるが、東端の部分が一段低くなっており、西側から東側に向かい緩やかに傾斜する。壁は垂直気味に立ち上がる。

土壌内からは、0.05~0.15cmの礫が比較的多くみられ、それに混じり土師質土器等の遺物も出土した。礫のなかにはほぼ床面から出土するものもあったが、多くは床面から浮いた状況であった。その状況からみて、本土壌は廃棄土壌的な性格を有するものと理解される。

出土遺物(第47図)には、土師質土器杯、小皿、瓦器碗、土鍋等がある。

62~69は土師質土器杯である。このうち62、63は器高の低い一群である。この中であって、さらに器高の低いものと、やや高いものに分類される。62が前者で、63が後者である。62は、体部が底部より直線的に立ち上がり口縁にいたる。復元口径12.4cm、高さ2.4cm、復元底径9.0cmを測る。63は体部の立ち上がり部がやや丸みをもつ。法量は復元口径12.8cm、高さ3.1cm、復元底径8.4cmである。64~69は、底径に比し器高が高いグループである。このうち64~67は、体部が内湾気味に口縁にいたり、口縁端部がやや尖り気味になるものである。各々の法量は、64が復元口径12.6cm、高さ3.7cm、復元底径6.0cm、65が復元口径12.4cm、高さ4.2cm、底径5.4cm、66が口径11.8cm、高さ3.7cm、底径6.4cm、67が復元口径12.2cm、高さ3.8cm、復元底径6.4cmである。

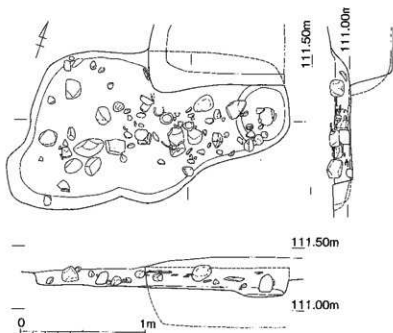
68、69は体部が直線的にのびるものである。この一群と体部が内湾気味なものとの器形的な違いはわずかであるが、器高がやや低くなる傾向がうかがえる。法量は68が復元口径12.6cm、高さ3.3cm、底径6.6cm、69が復元口径11.8cm、高さ3.4cm、底径6.6cmである。

70~73は土師質土器小皿である。いずれも、体部が底部と同じ厚みで短く立ち上がる。法量は、70が口径7.0cm、高さ1.3cm、底径6.3cm、71が口径7.6cm、高さ1.1cm、底径6.5cm、72が復元口径6.7cm、高さ1.1cm、底径5.1cm、73が口径7.8cm、高さ1.2cm、底径6.1cmである。

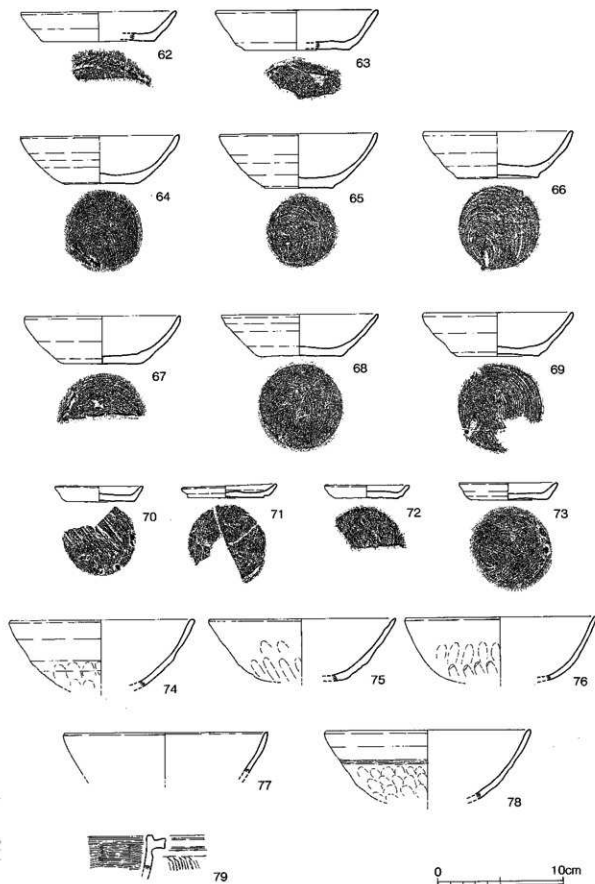
74~78は瓦器碗である。いずれも底部を欠く資料で、体部外面下半にはユビオサエが残る。

79が土鍋で、外面口縁下部に鋤状の突帯が付される。

以上は、13世紀後半~14世紀の所産である。



第46図 古庄屋遺跡 土壌53



第47図 古庄墓遺跡 土壘53 出土遺物

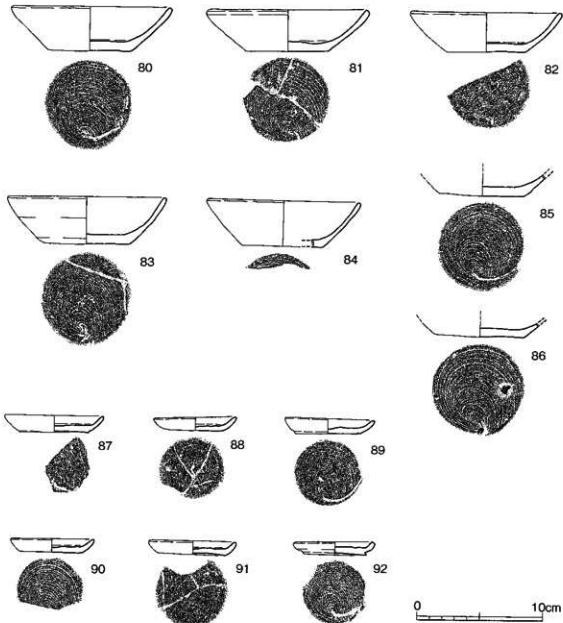
(4) 土壙54

土壙54(第49図)は、平面プランがやや不定形気味の楕円形を呈する。その規模は、長さ12m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。

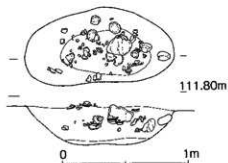
際立ち上がりは緩やかで、皿状を呈する。土壙内からは、0.1~0.2mの深さのほかに土器などが出土した。これらは、土壙の上層から中層にかけてみられ、床面から出土したものはない。土壙が中程まで埋没した段階で、一括廃棄されたものであろう。

出土遺物(第48、50図)には、土師質土器杯、小皿、石製品などがある。

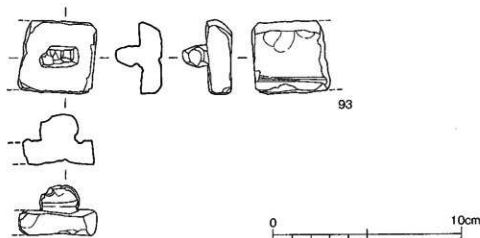
80~86は土師質土器杯で、いずれも底径に比し器高の低い一群である。80~84は全形の分る資料で、体部の立ち上がりはシャープで、やや内湾傾向を有するものの直線的に口縁にいたる。体部はいずれも、中程が薄く口縁ちかくがやや厚くなっている。各々の法量は、80が口径12.85cm、高さ3.45cm、底径6.6cm、81が復元口径12.9cm、



第48図 古庄屋遺跡 土壙54 出土遺物(1)



第49図 古庄屋遺跡 土壌54



第50図 古庄屋遺跡 土壌54 出土遺物(2)

高さ3.3cm、底径5.5cm、82が復元口径12.5cm、高さ3.1cm、底径6.2cm、83が復元口径12.7cm、高さ3.7cm、底径6.8～7.0cm、84が復元口径12.0cm、高さ3.55cm、復元底径6.4cmである。また、85、86は底部の資料である。

87～92は土師質土器小皿である。このうち87は、やや厚めの底部から薄い体部が直線的に引き上げられる。復元口径7.9cm、高さ1.3cm、復元底径5.6cmである。88～92は、内湾気味の体部形態を呈する。このなかで、92は体部が短い。分量は、88が口径6.65cm、高さ1.15cm、底径4.2cm、89が口径7.2cm、高さ1.3cm、底径5.2cm、90が口径6.7cm、高さ1.1cm、底径5.0cm、91が口径7.0cm、高さ1.1cm、底径5.3cm、92が口径6.5cm、高さ1.1cm、底径5.0cmである。

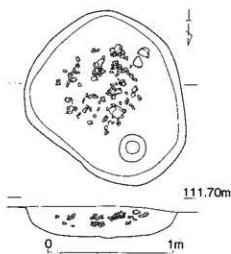
93は滑石製鍋の再加工品である。平面形態が方形を呈し、中央につまみ状のものが付く。

以上は、13世紀後半に比定される。

(5) 土壌55

土壌55(第51図)は、円形基調を呈するが、やや不定形気味である。その規模は、長径1.4m、短径1.2m、深さ0.25mを測る。床面は平坦でなく、中央部が凹み気味である。土壌内からは、鎌や土器片などが出土したが、いずれも上層から中層にかけてみられる。土壌が中程まで埋没したところで、一括して廃棄されたものであろう。

出土遺物のうち、図示可能なものについて述べる(第52図)。94は瓦器碗である。体部下半以下を欠くもので、復元口径14.0cmを測る。13世紀後半以降の所産であろう。



第51図 古庄屋遺跡 土壌55



第52図 古庄屋遺跡 土壌55 出土遺物

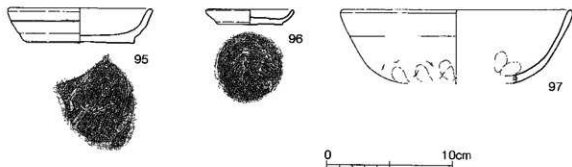
(6) 土壌56

土壌56(第54図)の平面プランは、長方形基調であるが、やや丸みをもつものである。その規模は、長さ1.45m、幅1.0m、深さ0.4mである。床面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

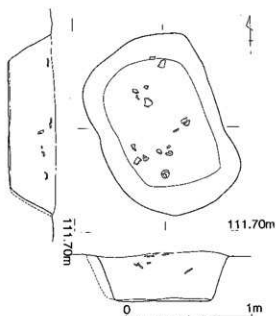
土壌内からは、土器片などの遺物が出土している。しかし、それらはいずれも土壌の上層からの出土で、床面出土のものはない。

出土遺物(第53図)のうち、95は土師質土器杯である。器高の低いタイプで、体部がやや内湾気味に立ち上がる。法量は復元口径11.6cm、高さ2.7cm、底径8.7cmである。96は土師質土器小皿で、内湾気味の体部をもつ。法量は口径7.0cm、高さ1.2cm、底径5.2cmである。97は瓦器碗である。

以上は、14世紀に下るものであろう。



第53図 古庄屋遺跡 土壌56 出土遺物



第54図 古庄屋遺跡 土壌56

(7) 土壌57

土壌57(第56図)は、平面形態が不定形を呈するものである。その規模は、長さ345m、幅1.1~2.1m、深さ0.15mを測る。

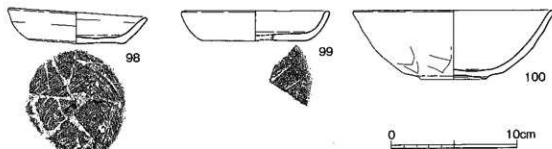
床面は比較的平坦で、土壌内からは0.05~0.25mの深さに混じり土器片などの遺物が出た。これらは、床面直上ではないが、比較的床面ちかくから検出された。本遺構は、廃棄土壌の性格を有するもので、出土遺物は土壌が埋没する早い段階で廃棄されたものである。

出土遺物(第55図)には、土師質土器環、瓦器碗がある。

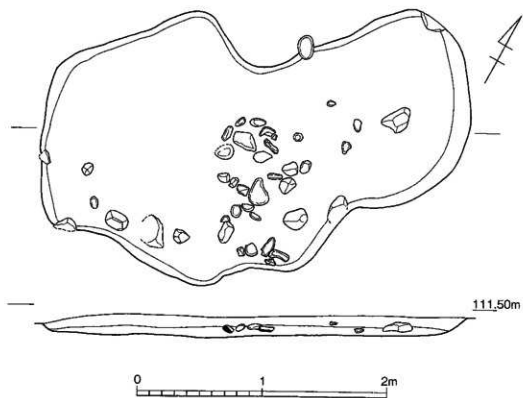
98、99は土師質土器環である。98は完形にちかいものである。体部は、底部から内湾気味に立ち上がる部分と直線的に立ち上がる部分がある。口縁部はわずかに外反気味である。法量は、口径11.1cm、高さ2.4cm、底径7.6cmである。99は小破片からの復元であるが、体部は内湾しながら口縁にいたる。法量は、復元口径11.9cm、高さ2.35cm、復元底径8.4cmである。

100は瓦器碗である。底部には退化した高台が付される。また、外面体部下半には板状工具によるナデがみられる。法量は、復元口径16.3cm、高さ5.35cm、復元底径5.7cmである。

以上のうち、土師質土器環の小型化が進んでいる点を考慮すると、14世紀代に位置付けられるであろう。



第55図 古庄屋遺跡 土壌57 出土遺物



第56図 古庄屋遺跡 土壌57

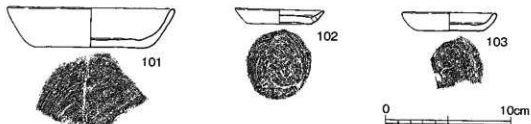
(8) 土壌58

土壌58（第58図）は、方形基調を呈するものである。その規模は、長さ2.1m、幅1.0～1.25m、深さ0.1mである。床面はほぼ平坦で、柱穴状のものが2本みられる。柱穴と切り合っている可能性が高いが、その後関係は不明である。

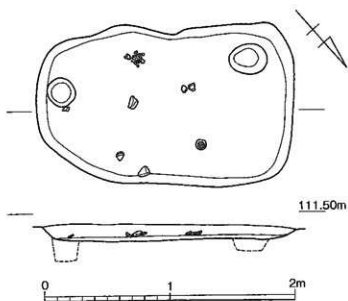
土壌内からは土器片などが出土した。いずれも床面ちかくからの出土である。

出土遺物（第57図）のうち、101は土師質土器坏である。体部は丸みをもち立ち上がり、直線的に口縁部にいたる。法量は、復元口径13.4cm、高さ3.55cm、復元底径9.0cmである。102、103は土師質土器小皿である。102は体部が斜方向に立ち上がり、103は体部が内湾気味である。法量は、102が口径7.0cm、高さ1.3cm、底径5.1cm、103が復元口径7.5cm、高さ1.45cm、底径5.2cmである。

以上は、13世紀中～後葉に位置付けられる。



第57図 古庄屋遺跡 土壌58 出土遺物

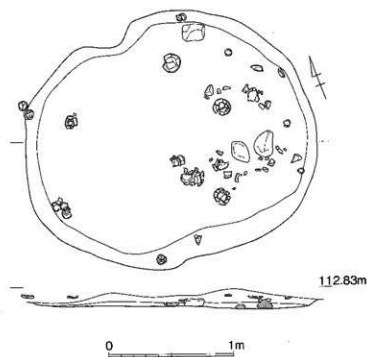


第58図 古庄屋遺跡 土壌58

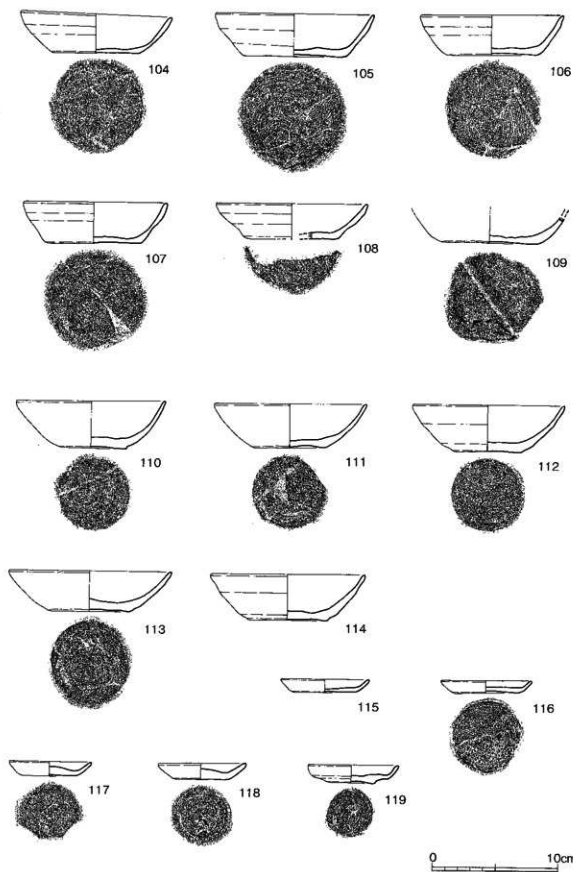
(9) 土壌59

土壌59（第59図）はⅡ区に位置し、平面プランは円形基調を呈する。その規模は、長径2.3m、短径2.1m、深さ0.05～0.15mである。壁の立ち上がりはかなり緩やかな部分もある。また、床面は平坦である。

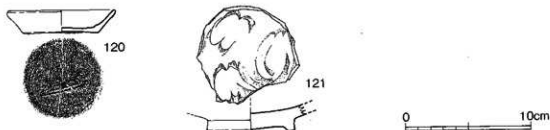
土壌内からは、径0.2m程の礫とともに土師質土器などの遺物が出土した。礫は床面直上にあるが、土器などについては床面より浮いて出土したものが多かった。



第59図 古庄屋遺跡 土壌59



第60図 古庄屋遺跡 土壇59 出土遺物(1)



第61図 古庄屋遺跡 土壌59 出土遺物(2)

出土遺物(第60、61図)には、土師質土器杯、小皿、青磁碗などがある。

104から114は土師質土器杯である。このうち、104～109は底径が大きいもので、底径は7.0cm以上である。そのため、後述する底径の小さいものに比べ、器形がやや扁平に感じる。各々の法量は、104が口径120cm、高さ2.8～3.2cm、底径7.0cm、105が口径126cm、高さ3.4cm、底径8.0cm、106が復元口径11.3cm、高さ3.2cm、底径7.2cm、107が口径11.3cm、高さ3.3cm、底径7.5cm、108が復元口径11.8cm、高さ2.8cm、底径7.0cm、109が底径7.8cmである。110～114は底径が小さなもので、各々の法量は、110が口径12.8cm、高さ3.6cm、底径5.3cm、111が復元口径12.6cm、高さ3.5cm、底径5.6cm、112が復元口径12.0cm、高さ3.6cm、底径5.4cm、113が復元口径12.3cm、高さ3.2cm、底径6.2cm、114が口径12.0cm、高さ2.6cm、底径6.2cmである。

115～120は土師質土器小皿である。このうち、115～119は体部を斜方向に引き上げる。各々の法量は、115が口径70cm、高さ1.0cm、底径4.9cm、116が口径7.2cm、高さ1.0cm、底径5.2cm、117が口径6.5cm、高さ1.1cm、底径4.4cm、118が口径70cm、高さ1.2cm、底径4.2cm、119が口径7.1cm、高さ1.4cm、底径3.6cmである。120は口径と器高が大型化するものである。体部は底部からシャープに立ち上がり、直線的に口縁にいたる。法量は、口径8.4cm、高さ1.8cm、底径6.0cmを測る。

121は龍泉窯系青磁碗の底部である。

以上の時期は、土師質土器小皿の小形化と大型小皿の出現から14世紀代に下るものであろう。

00 土壌60

土壌60(第62図)はⅡ区に位置し、平面プラン円形を呈するものである。その規模は、径2.5～2.7m、深さ0.1～0.15mである。床面は緩やかな凹凸が認められ、壁の立ち上がりは非常に緩やかである。

土壌内からは、径0.1～0.3mの隙とともに多くの土器が出土した。これらは、床面からやや浮いたものが多数を占め、土壌がある程度埋没したところで一括廃棄されたものであろう。

出土遺物(第63、64図)には、土師質土器杯、小皿、輸入陶磁器などが出土した。

土師質土器杯のうち、122～127は底径が7.0cm以上で、相対的に器高が扁平に感じる一群である。122は体部がシャープに立ち上がり、直線的に口縁にいたる。126、127も同様な器形を呈する。123～125は内湾気味の体部をもつ。各々の法量は、122が口径13.0cm、高さ3.2cm、底径9.6cm、123が口径11.7cm、高さ3.4cm、底径7.2cm、124が口径12.0cm、高さ3.2cm、底径7.1cm、125が口径11.7cm、高さ3.4cm、底径7.6cm、126が口径11.5cm、高さ3.2cm、底径7.8cm、127が復元口径11.8cm、高さ3.3cm、底径7.6cmである。

128～141は底径に比し器高の高い一群である。このうち、128～132はやや内湾気味の体部を有するものである。各々の法量は、128が口径13.0cm、高さ3.6cm、底径5.2cm、129が口径13.0cm、高さ4.1cm、底径6.4cm、130が口径12.6cm、高さ3.3cm、底径7.2cm、131が口径12.5cm、高さ3.3～3.6cm、底径5.8cm、132が口径12.2cm、高さ3.9cm、底

径5.6cmである。

133は体部が比較的直立気味である。法量は、復元口径12.0cm、高さ4.1cm、底径6.8cmである。

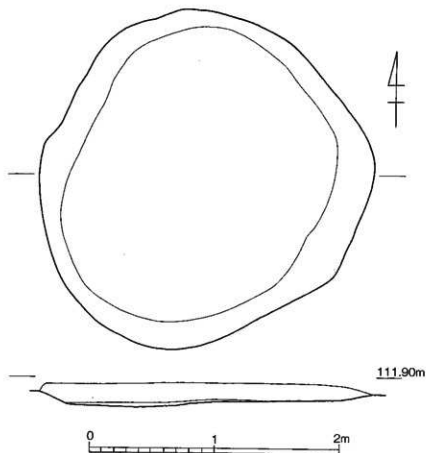
134～141は、体部が斜方向に直線的にのびるものである。各々の法量は、134が口径12.4cm、高さ3.7cm、復元底径6.4cm、135が口径13.2cm、高さ4.8cm、底径6.0cm、136が口径13.2cm、高さ3.6cm、底径6.9cm、137が口径13.4cm、高さ4.3cm、底径6.8cm、138が口径13.4cm、高さ4.1cm、底径6.0cm、139が口径11.9cm、高さ3.5cm、底径6.0cm、140が口径13.4cm、高さ6.0cm、底径3.8～4.2cm、141が復元口径13.1cm、高さ3.7～4.4cm、底径6.8cmである。

142～146は土師質土器小皿である。142～145は体部が斜方向に引き上げられ、146は体部の立ち上がり丸みを持ち、器高が他に比べやや高い。法量は142が口径6.0cm、高さ1.1cm、底径5.0cm、143が復元口径7.0cm、高さ1.0cm、復元底径5.6cm、144が口径7.0cm、高さ1.1cm、底径5.0cm、145が復元口径6.4cm、高さ1.0cm、底径4.5cm、146が口径7.2cm、高さ1.5cm、底径5.4cmである。

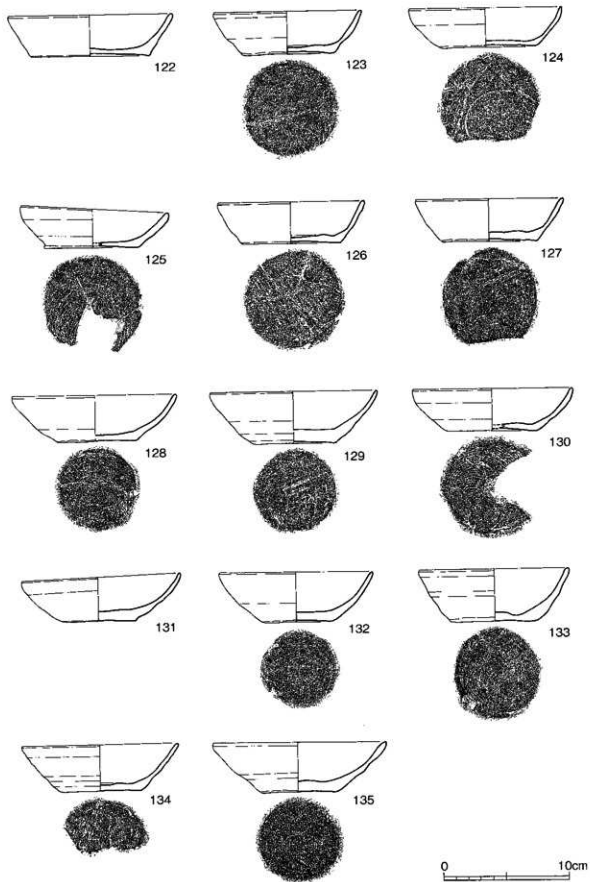
147、148は瓶と思われ、147は壺である。

149は土鍋である。破片資料のため法量等は不明である。口縁部が外方に強く折れる。内面体部には横方向のハケメが施される。また、外面にはユビオサエがみられる。

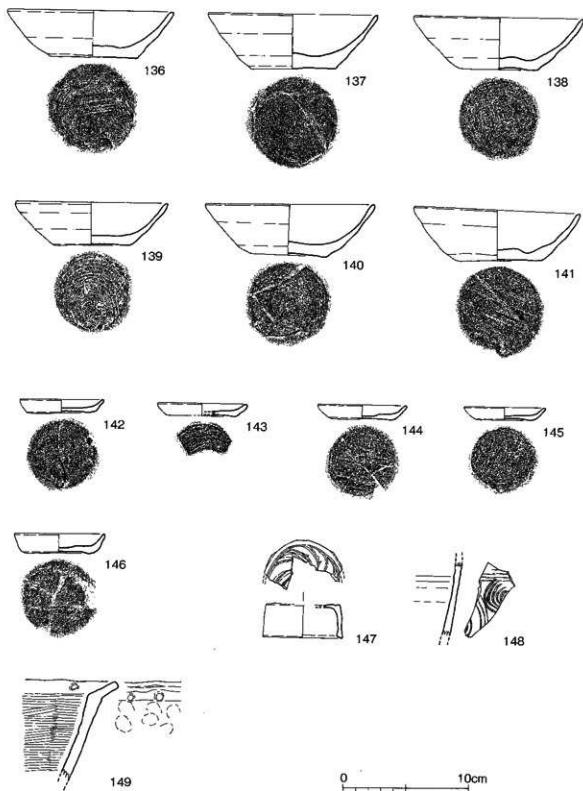
以上の時期は、13世紀後葉に位置付けられる。



第62図 古庄屋遺跡 土壌60



第63図 古庄屋遺跡 土壇60 出土遺物(1)



第64図 古庄屋遺跡 土壌60 出土遺物(2)

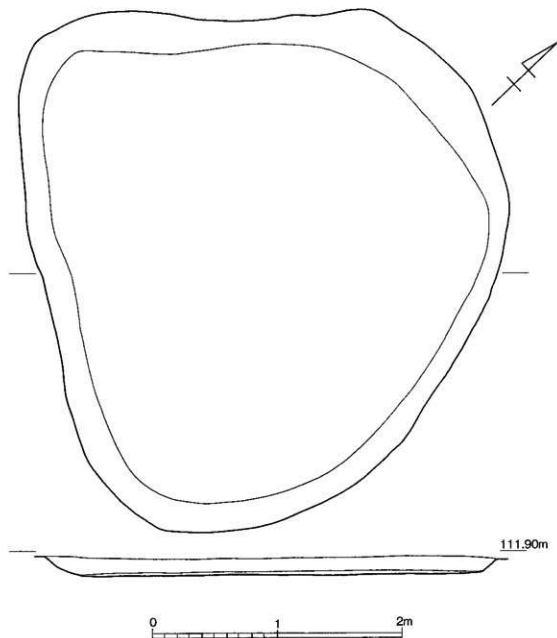
(1) 土壌61

土壌61（第65図）は、Ⅱ区に位置する大型の遺構である。平面プランは不定形気味で、その規模は3.8×4.2m、深さ0.15mである。床面は比較的平坦で、壁の立ち上がりも比較的緩やかである。

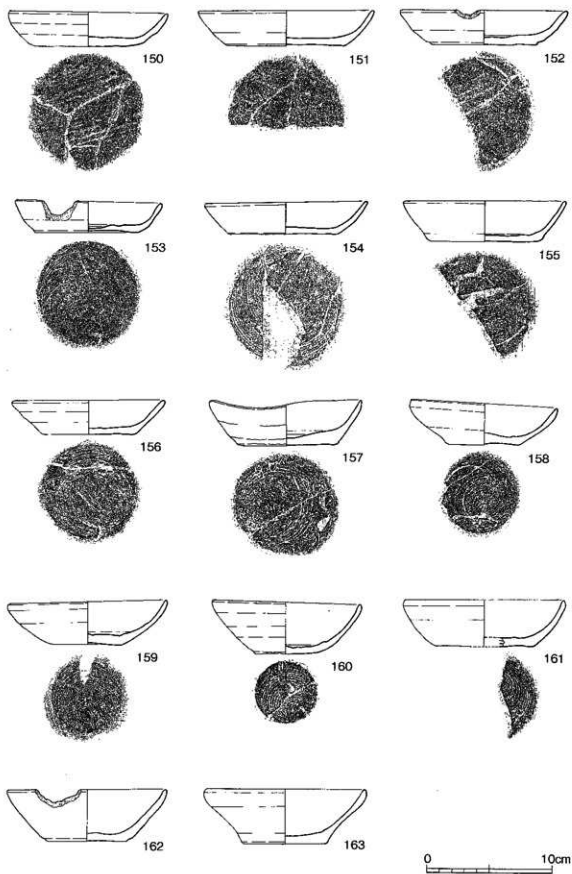
出土遺物（第66～69図）には、土師質土器杯、小皿、瓦器輪、青磁、土鍋、石鍋、土鉢、漆塗り椀などがある。

150～169は土師質土器杯である。

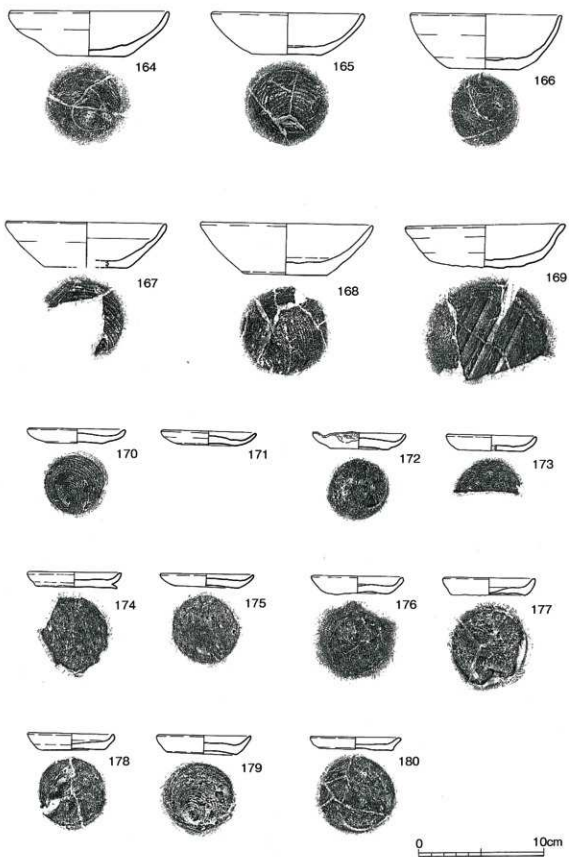
このうち、150～154は、底径が8.0cm以上で、器高が3.0cm以下のものである。器形的には扁平な感じを受ける。体部の立ち上がりは、150を除きシャープで、体部はわずかに内湾気味に口縁にいたる。また、器厚をみると、底部と体部の厚さがほとんど換わらない。これらの法量は、口径が118～14.0cm、高さが2.3～2.8cm、底径が



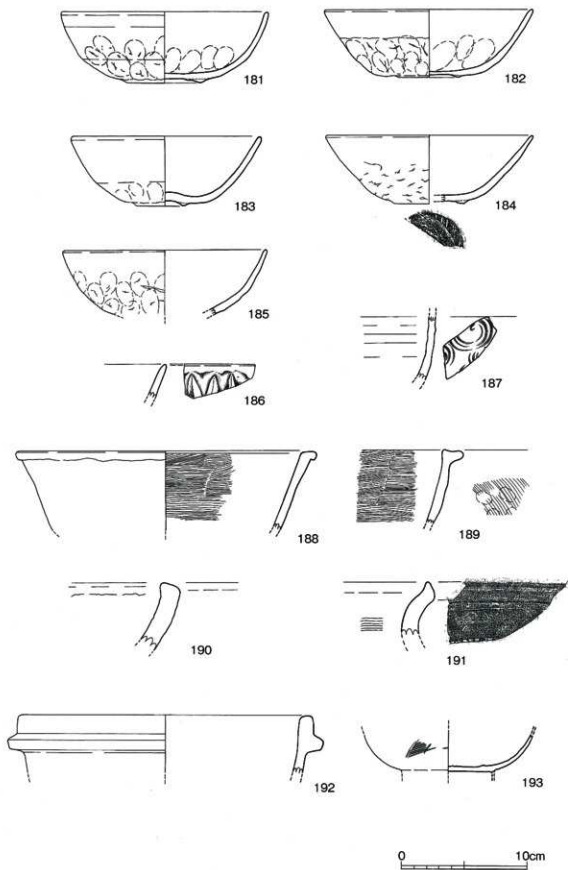
第65図 古庄屋遺跡 土壌61



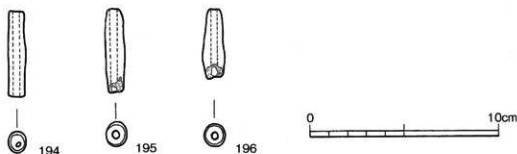
第66図 古庄屋遺跡 土壌61 出土遺物(1)



第67図 古庄屋遺跡 土壇61 出土遺物(2)



第68図 古庄屋遺跡 土壙61 出土遺物(3)



第69図 古庄屋遺跡 土壌61 出土遺物(4)

8.4~9.4cmである。

155~157, 161, 169は底径が7.0cm以上で、器高がおおむね3.0cm以上のものである。全体として扁平な感じはなくなる。体部は底部からシャープに立ち上がり直線的に口縁にいたるもの(155~157)、体部が内湾気味のもの(161)、口縁がわずかに外反するもの(169)などがみられる。これらの法量は、口径が12.2~13.0cm、高さが2.7~3.6cm、底径が7.3~8.4cmである。

158~160, 162~168は底径が7.0cm以下で、器高が3.0cm以上のものである。底径が小さいにもかかわらず、器高が比較的高いため、器高の高さが強調される感がある。このうち、158~160, 164~166は体部が内湾気味に口縁にいたる。これらの法量は、口径が11.9~12.8cm、高さ3.0~4.3cm、底径3.9~5.6cmを測る。また、155, 156, 160, 161は体部が斜方向に直線的にのびる。この中で、163は体部中程の器厚が薄くなり、口縁部付近が厚くなる。これらの法量は、口径が12.8~13.9cm、高さが3.6~4.3cm、底径6.0~6.6cmを測る。

170~180は土師質土器小皿である。

このうち、170~173は体部が底部から緩やかに立ち上がる。体部は内湾したまま口縁部にいたる。法量は、口径は7.3~7.9cm、高さは1.1~1.3cm、底径は4.5~5.2cmである。

174~180は、底部から体部が短く立ち上がるものである。立ち上がりは、比較的シャープなものが多い。法量は、口径が7.0~7.6cm、高さが0.9~1.6cm、底径が4.6~6.6cmである。

181~185は瓦器碗である。いずれも体部にヘラミガキがみられず、底部の高台の退化も著しい。外面体部下半にはユビオサエが残る。器形的には、体部が高台部から比較的直線的に立ち上がるもの(184)と体部下半が丸みをもつもの(181~183)がある。これらの法量は、口径が15.3~16.6cm、高さが5.2~5.5cm、底径3.7~5.8cmを測る。

186, 187は輸入陶磁器である。186は、鎗蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗である。187は青白磁瓶の体部である。

188は鉢である。口縁端部外側が肥厚する。内面には横方向のハケメが施される。

189は土鍋である。外面に鈔状の突帯が付されるが、口縁最上部の位置にある。内面には横方向のハケメが、外面にはユビオサエと縦方向のハケメがみられる。

190は大型品の口縁部である。鉢か。191は甕の口縁部である。口縁端部が上方に引き上げられる。内面頭部に横方向のハケメがみられる。192は滑石製鍋である。193は漆塗り碗である。内外面に漆が塗られており、外面には文様がみられる。194~196は土錫である。

以上の時期は、古相のものを含むが、14世紀まで下る可能性をもつ。

(2) 土壌62

土壌62(第70図)は、Ⅱ区に位置する。平面形態は不定形を呈し、その規模は長さ4.4m、幅2.9~3.3m、深さ0.15mである。

出土遺物(第71, 72図)は、土師質土器杯、小皿、瓦器碗、輸入陶磁器などがある。

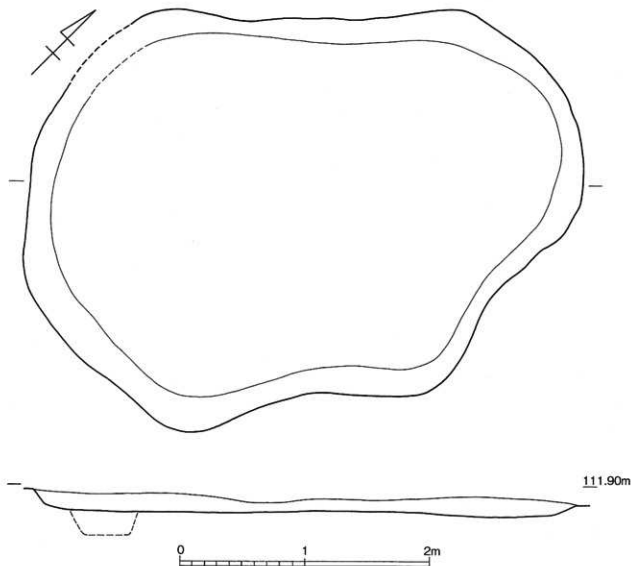
197～200は土師質土器坏である。このうち、197は器高が低いものである。法量は、口径12.0cm、高さ3.1cm、底径7.9cmを測る。

198～200は底径に比し、器高が高いものである。この中には、体部が直線的にのびるもの（198）と体部が内湾するもの（199、200）がある。法量は、198が口径11.9cm、高さ3.9m、底径6.4cm、199が口径12.3 cm、高さ3.7m、底径5.2cm、200が口径14.0cm、高さ3.8cm、底径5.4cmである。

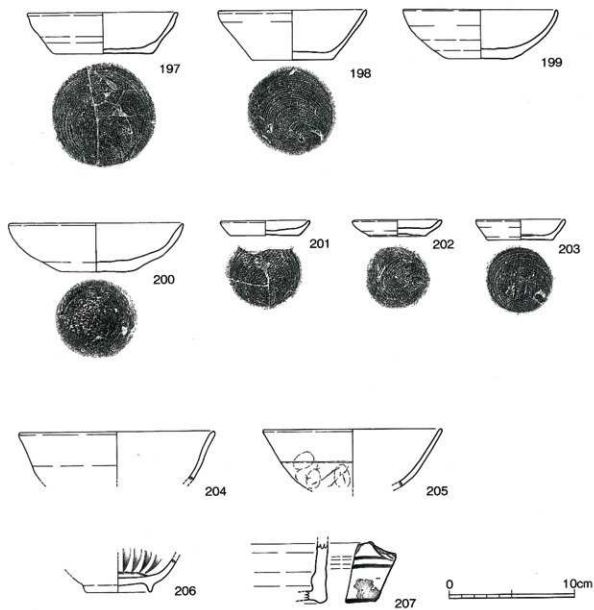
201～203は土師質土器小皿である。このうち201と202は、体部がシャープに短く立ち上がる。法量は、201が口径7.2 cm、高さ1.2m、底径5.4cm、202が口径7.2cm、高さ1.2cm、底径4.6cmである。203は、器高、口径が他の小皿より一回り大きいものである。法量は、口径7.2cm、高さ1.6cm、底径5.3cmである。

204と205は瓦器碗である。206は青磁碗、207は青白磁の香炉であろう。

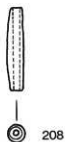
208は土鍾である。重量は29 gである。



第70図 古庄屋遺跡 土塊62



第71図 古庄屋遺跡 土壌62 出土遺物(1)

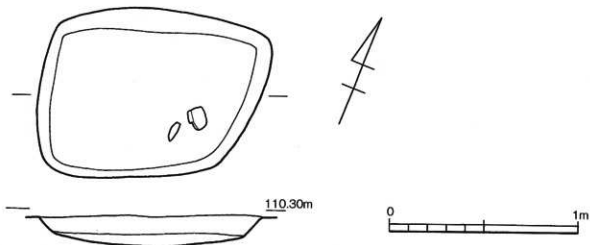


第72図 古庄屋遺跡 土壌62 出土遺物(2)

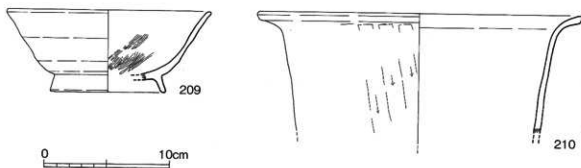
(13) 土壌63

土壌63（第73図）は、Ⅲ区に位置する。平面プランは長方形基調を呈する。その規模は、長さ1.2m、幅0.9m 深さ0.1～0.15mである。

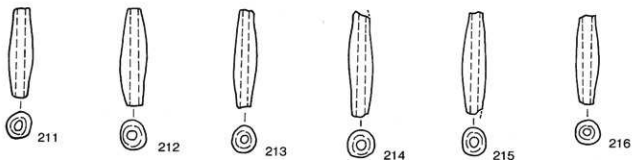
出土遺物（第74、75図）のうち、209は内黒土器高台付き碗である。高台は断面長方形の比較的高いものが付く。体部の立ち上がりは、丸みもち緩やかである。口縁部にむかいわずかに外反気味にのびる。内面にはヘラ



第73図 古庄屋遺跡 土壌63



第74図 古庄屋遺跡 土壌63 出土遺物(1)



第75図 古庄屋遺跡 土壌63 出土遺物(2)

ミガキが残る。復元口径16.0cm、高さ6.3cm、底径9.2cmを測る。

210は甕である。直線的な胴部から、口縁部が緩やかに大きく外反する。

211～216は土鍾である。いずれも長さ5.0cm前後のものである。重量は、211が6.6g、212が8.7g、213が7.2g、214が8.7g、215が7.6g、216が7.3gである。

以上の時期は、9世紀代後半に位置付けられる。

04 土壌64

土壌64（第76図）もⅢ区に位置する。平面プランは円形を呈するもので、その規模は径1.7～1.8m、深さ0.1～0.2mである。床面は平坦で、壁は斜方向に立ち上がる。

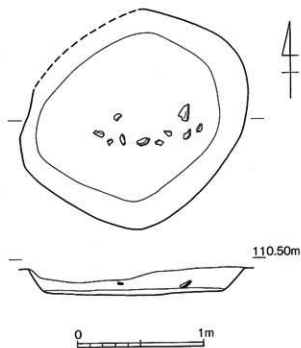
土壌内からは土器片などの遺物が少数出土したが、いずれも床面から浮いた状況である。

出土遺物（第77、78図）には土師器皿、甕、土鍾がある。

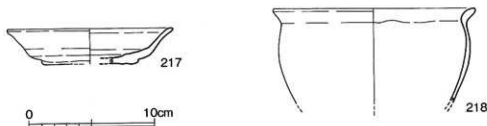
217は土師器皿である。底部の切り離しは、磨滅のため不明である。体部は底部から緩やかに立ち上がり、外反気味に口縁にいたる。復元口径13.0cm、高さ2.7cm、復元底径7.4cmである。

218は甕である。球状の胴部から口縁部が短く折れる。口縁部付近は、他に比べ厚い。219は土鍾である。

以上は、古代に位置付けられる可能性が高い。



第76図 古庄屋遺跡 土壌64



第77図 古庄屋遺跡 土壌64 出土遺物(1)



第78図 古庄屋遺跡 土壌64 出土遺物(2)

(5) その他の土壌出土遺物

これまで紹介した以外の土壌のうち、主なものについて、出土遺物（第79図）のみを報告する。

・土壌65

220は土師質土器小皿である。体部は底部とほぼ同じ厚みを有し、斜方向に緩やかに立ち上がる。体部は内湾気味のまま口縁にいたり、端部は丸くおさめる。法量は、復元口径7.55cm、高さ1.0cm、復元底径5.0cmを測る。

221は瓦器椀である。底部を欠く資料で、復元口径16.2cmを測る。

・土壌66

222、223とも、体部が底部とほぼ同じ厚みをもち斜方向に立ち上がる。口縁端部は、222がやや尖り気味である。各々の法量は、222が口径7.4cm、高さ1.05cm、底径5.6cm、223が口径7.8cm、高さ1.2cm、底径5.0cmを測る。

・土壌67

224は土師質土器小皿である。直立気味に体部は、底部から丸みをもち立ち上がる。法量は、復元口径7.1cm、高さ1.2cm、底径5.6cmを測る。

225は土鍋である。外面最上部に鋳状の突帯が付される。内面に横方向のハケメが、また外面に斜方向のハケメが各々施される。

・土壌68

226は龍泉窯系青磁碗の底部である。内面体部と見込み部に文様が施される。

・土壌69

227は土師質土器坏である。器高の高いタイプのものである。体部は底部から斜方向に立ち上がり、口縁部ちかくでやや内湾気味となる。法量は、復元口径12.2cm、高さ3.75cm、復元底径5.0cmを測る。

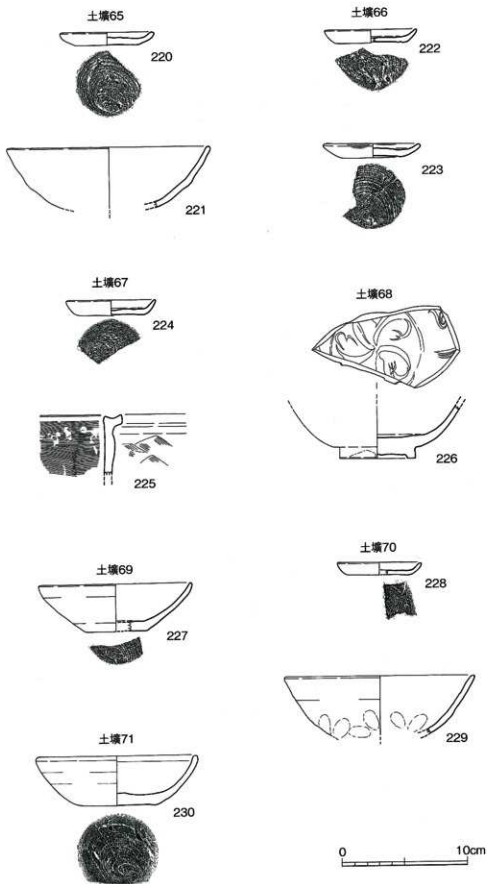
・土壌70

228は土師質土器小皿である。体部は、底部と同じ厚みをもち斜方向に立ち上がる。体部はやや内湾気味のまま口縁にいたる。法量は、復元口径6.7cm、高さ1.0cm、復元底径5.0cmを測る。

229は瓦器椀である。底部を欠く資料で、復元口径は15.2cmを測る。体部は、下半が丸みをもち下膨れ気味ではなく、口縁部にむかい直線的にのびる。外面体部下半にはユビオサエがみられる。

・土壌71

230は土師質土器坏である。器高の高いタイプのもので、体部は内湾気味に口縁にいたる。法量は、復元口径13.0cm、高さ3.9cm、底径5.9cmを測る。



第79図 古庄屋遺跡 その他の土壌出土遺物

4 井戸

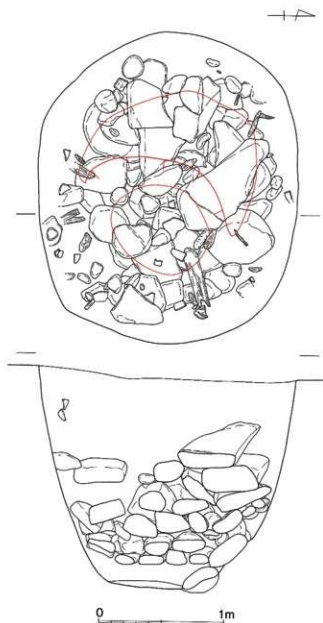
(1) 井戸2

井戸2（第80図）は溝6と重複しており、溝6を切っている。

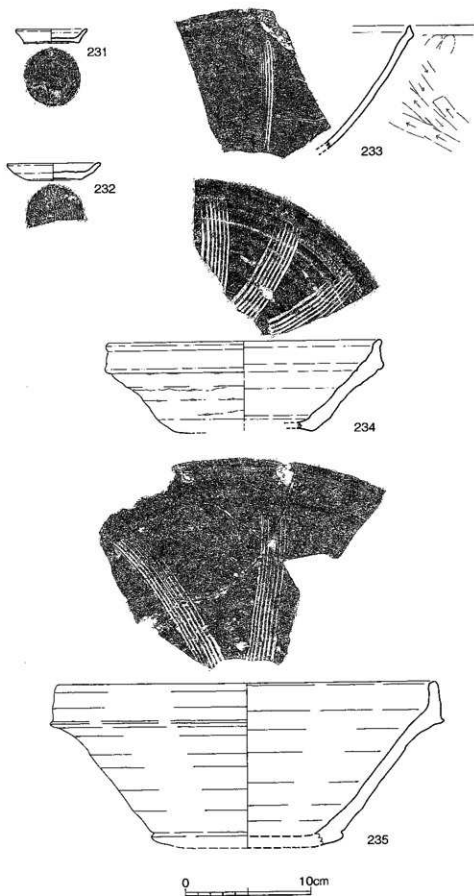
井戸の平面プランは円形基調を呈する。その規模は、長径2.45m、短径2.05m、深さ1.75mを測る。底面では約0.5mの段がつき、最終的な底径は0.65～0.8mである。

井戸は素掘りである。また、底面についても慎重に掘り進めたが、桶等は確認されなかった。下層から中層にかけては、多くの石材がみられる。石材の大きさは0.2～0.9mを測り、井戸廃絶後に投棄されたものと思われる。

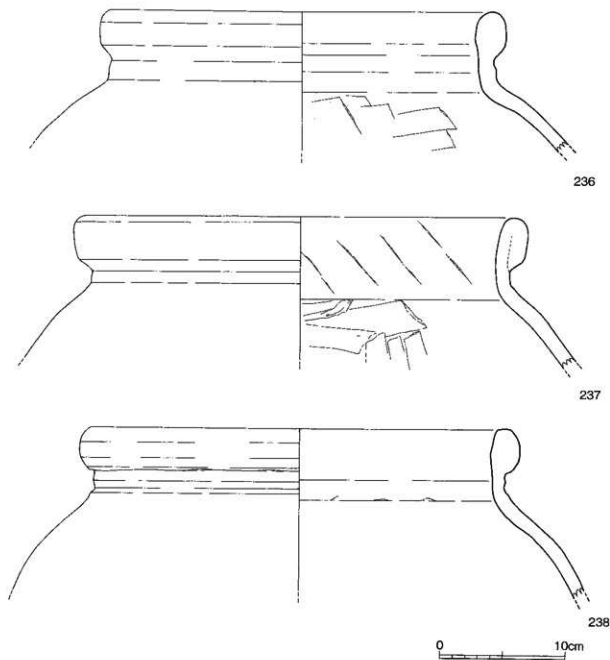
石材に混じり土器や木材が出土しているが、木製品は確認されなかった。



第80図 古庄屋遺跡 井戸2



第81図 古庄屋遺跡 井戸1 出土遺物(1)



第82図 古庄屋遺跡 井戸2 出土遺物(2)

井戸からは、土師質土器、瓦質土器、備前焼などが出土した(第81、82図)。

231、232は土師質土器小皿である。231は体部が直立気味に立ち上がり、外反気味に口縁にいたる。口径5.7cm、高さ1.2cm、底径4.3cmを測る。232は、やや厚い底部から体部が斜方向に引き上げられる。口径7.3cm、高さ1.7cm、底径4.2cmを測る。屋敷の北を向する施設と考えられる。

233は瓦質土器捕鉢である。外面にはヘラケズリが施され、口縁端部は上方に摘みあげられ、断面三角形を呈する。内面の摺目は6本単位である。

234、235は備前焼捕鉢である。このうち234は復元口径21.4cmの小型品で、口縁の立ち上がりは顕著でない。235は内傾気味に口縁が立ち上がるが、外面には凹線等はみられない。摺目は両者とも7本である。

236～238は備前焼甕で、玉縁状口縁を呈する。

以上のうち、232は13世紀代の混ざり込みと思われる、他は16世紀の所産である。

5 溝

(1) 溝6

溝6は、Ⅰ区、Ⅱ区の北端に位置する(付図)。溝は第一次調査の際にも確認されており、第二次調査区のⅠ区とⅡ区でその延長が確認された。

溝は東西方向にほぼ直線的にのびており、その方位はN62°Eである。溝の北側のⅢ区では、中世の明確な遺構は確認されておらず、溝6が屋敷の北を画する施設と考えられる。溝6の北側からは、小字が前田となり、往時の中世的景観を想起することができる。一方、屋敷の南を画する施設が溝1である。溝1の方位はN85°Eで、溝6とはほぼ平行する。両者の距離は、溝の内側で約100mを測る。

溝6は幅約3m、深さ0.7~0.9mで、断面が逆台形を呈する。土層図(第83図)をみてみると、各土層とも南側からの堆積が顕著である。溝の南側の幅約5mは、遺構の数が少ない。よって、溝の南側すなわち屋敷の内側に土器が築かれていたものと推定される。これに対し、屋敷の南を画する溝1では、屋敷の外側である溝の南側に土器が築かれていたことが第一次調査で確認されている。

また、土層図をさらに詳しくみると、2~3回の掘り直しが確認される。溝の幅は、その度に狭くなる傾向にある。出土遺物(第84~87図)には、土師質土器杯、小皿、瓦器碗、輸入陶磁器、土鍋、土釜、石製品などがある。239~244は土師質土器杯である。いずれも器高の高い一群である。いずれも、体部は斜方向に立ち上がり口縁にいたるものである。これらの法量は、口径11.8~13.2cm、高さ3.3~3.9cm、底径5.0~7.2cmである。

245~254は土師質土器小皿である。このうち、245は溝上層から出土したものである。体部が直立気味に立ち、端部が尖るものである。法量は、口径5.0cm、高さ0.7cm、底径4.0cmである。これは16世紀代のもので、溝6が埋没後に掘りこまれた遺構中にあったものであろう。

246~248、251は、厚い底部からやや薄い体部が緩やかにのびる。いずれも体部は内湾気味である。法量は、口径6.8~8.3cm、高さ1.1~1.65cm、底部4.4~5.5cmである。

249、250、252は、体部が底部と同じ厚みで斜方向に立ち上がるもので、いずれも体部はやや内湾気味である。法量は、口径6.6~7.5cm、高さ1.1~1.6cm、底径4.7~5.2cmを測る。

253、254は体部と底部が同じ厚みをもつもので、体部が斜方向に直線的に引き上げられる。法量は、口径6.6~7.0cm、高さ0.9cm、底径5.0~5.4cmを測る。

255~257は瓦器碗である。255は高台の退化が著しく、底径も縮小が目立つ。器形も、体部が高台から直線的に立ち上がらず、体部下半が著しく丸みをもつ。全体として扁平な感じを受ける。256も、255ほどではないが、同様な器形を呈する。

258は白磁碗で、玉縁口縁を呈する。259は青磁碗底部で、外面に鎔毫弁文がみられる。

260~263は土鍋である。このうち、260~262は外面口縁下に銅状の突帯が付されるものである。260、261は突帯が口縁の少し下に付くが、262は口縁端部まで上がっている。調整は、260と262の内外面にハケメがみられ、両者とも外面縦方向、内面横方向である。

263は、口縁部が体部から短く外方に入れるものである。調整は、内外面にハケメが施されており、外面縦方向、内面横方向である。

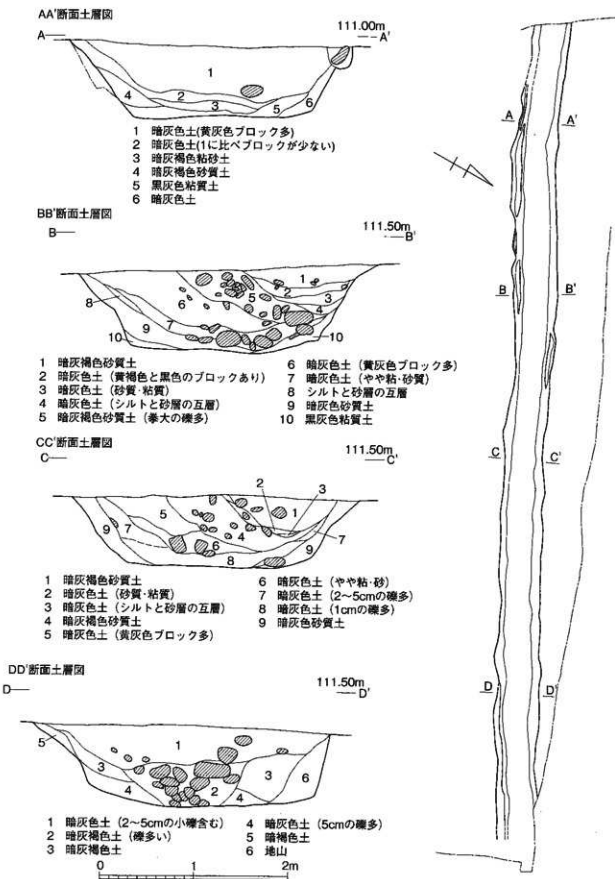
264は脚部である。

265は瓦質土器甕で、外面に格子目タタキが施される。

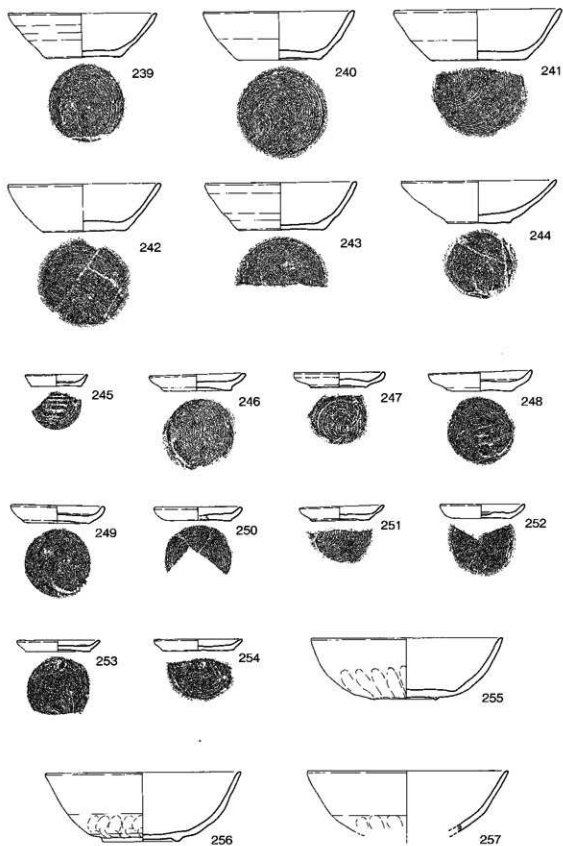
266~269は土釜であるが、いずれも欠損品である。

270、271は石製品である。両者とも滑石製で、石鍋の再利用品と思われる。270は平面形態が長方形を呈し、掴み状のものが付く。271は土鍋底部を半月形に加工したものである。

以上の遺物は、一部に占相のものを含むが、全体として14世紀前葉に位置付けられよう。

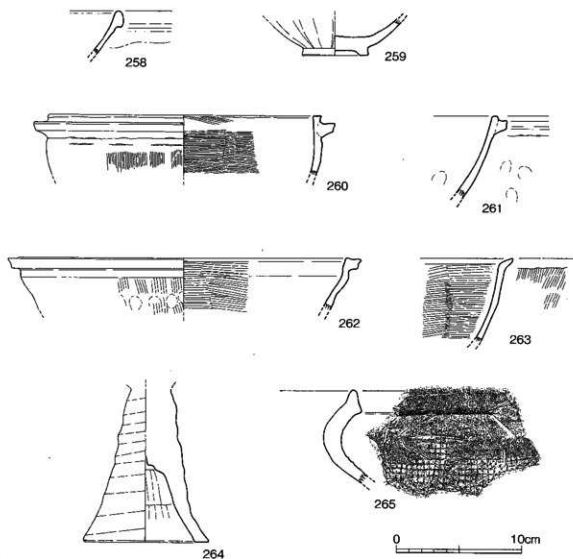


第83図 古庄屋遺跡 溝6 土層図

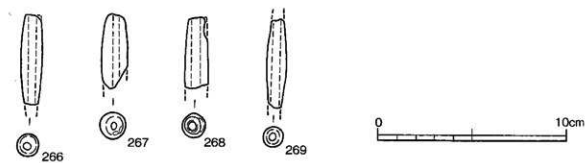


第84圖 古庄屋遺跡 溝6 出土遺物(1)

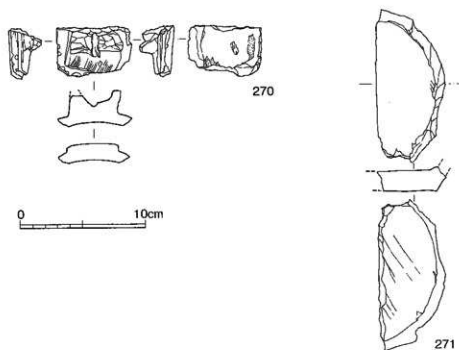
0 10cm



第85図 古庄屋遺跡 溝6 出土遺物(2)



第86図 古庄屋遺跡 溝6 出土遺物(3)



第87図 古庄屋遺跡 溝6 出土遺物(4)

6 その他の出土遺物

(1) 柱穴出土遺物

その他の出土遺物のうち、掘立柱建物跡として復元できなかった柱穴から出土した遺物を紹介する（第88～90図）。

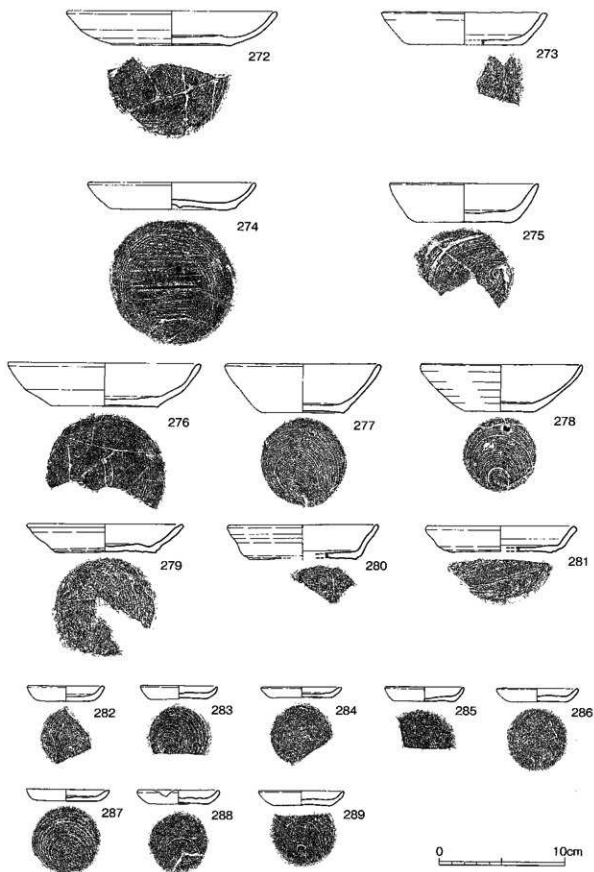
272～281は土師質土器片である。

272～278は中世前半に位置付けられるもので、このうち272～276は底径が大きく、器高の低いものである。272～274は、器高3cm以下の、より器高の低いものである。全体として扁平な感じを受ける。272は復元口径16.7cmを測る大型品で、本遺跡における中世前半の遺物としては最も古い段階のものである。12世紀代に位置付けられよう。273、274の口径は13cm代の前半である。11径からみて、13世紀後半に比定されよう。一方、275、276は器高3cmを越える、やや器高の高いものである。276は復元口径15.4cmを測るもので、12世紀代まで遡りうるものである。277、278は、底径が小さく、器高の高いものである。いずれも体部が内湾気味である。13世紀後半以降の所産である。

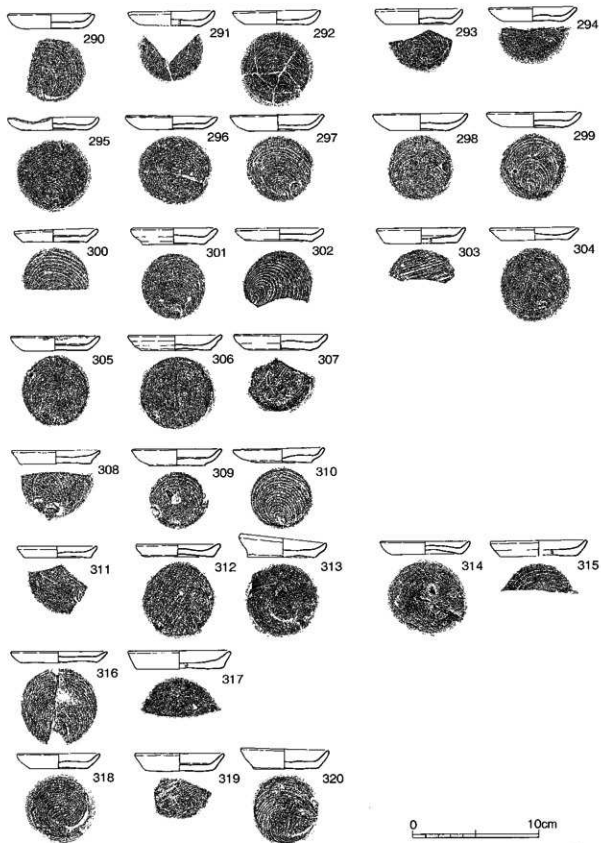
279～281は中世後半のものである。279は体部が斜方向にのびる。280、281は体部立ち上がり部付近で、一旦屈曲し、外反気味に口縁部にいたる。全体として体部は直立気味である。口径11.8～12.3cm、高さ2.0～2.7cm、底径8.0～8.6cmを測る。

282～325は土師質土器小皿である。このうち、282～320は中世前半のものである。282～299、309、310は内湾気味の体部形態を呈するものである。309、310は厚い底部から薄い体部が内湾して立ち上がる。器高はいずれも1cm余で、口径は6cm代のものと7cm代のものがみられる。300～308、311～320は直線的な体部を有するものである。これらの中には、いくつかの形態的バリエーションがみられる。口径は6cm代のものと7cm代のものがある。

321～325は中世後半の所産である。このうち321～324は体部が短く直立するもので、324のみ外反する。いず



第88図 古庄屋遺跡 柱穴出土遺物(1)



第89図 古庄屋遺跡 柱穴出土遺物(2)

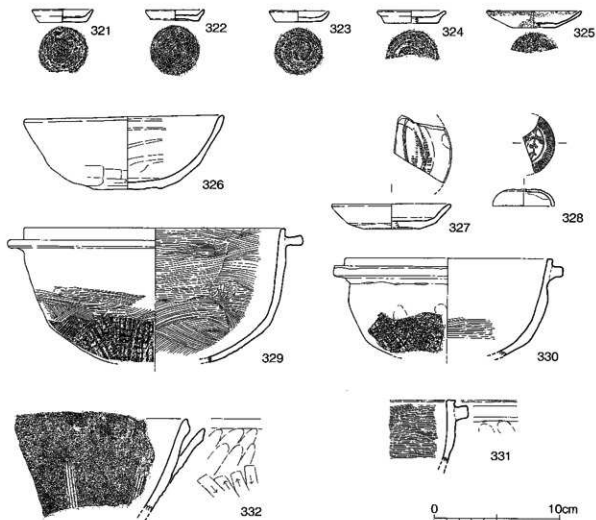
れも器高1cm以下で、口径は4.6~5.4cmを測る小型品である。325は、全体に器厚が薄いもので、小さい底部から斜方向に休部がのびる。口径は7.6cmを測る。

326は瓦器鉢である。内面にわずかにヘラミガキがみられる。高台は低く、退化が著しい。分量は口径15.5cm、高さ5.9cm、底径5.5cmを測る。

327、328は輸入陶磁器である。327は河安窯系の青磁皿である。328は青白磁合子の蓋である。外面に花文が施される。

329~331は上鍋である。いずれも外面口縁下に鐮状の突帯が付されるものである。329と330は全形に分る資料である。329は口径約21cmを測る。体部上半は直立気味で、底部は丸底を呈するものと思われる。内面には横方向のハケメがみられ、外面には上半に横方向のハケメ、下半に格子目タキがみられる。330も329と同様な器形を呈するが、口径16.5cmとやや小型である。やはり底部下半に格子目タキが施される。以上は、13世紀代に位置付けられる。

332は瓦質土器播鉢である。口縁端部は上方に引き上げられる。外面には、縦方向のヘラケズリがみられる。内面の摺り目は4本単位である。中世後期の所産である。



第90図 古庄屋遺跡 柱穴出土遺物(3)

(2) その他の遺物

中世の遺構に混入した縄文土器、あるいは包含層や表土中から出土した中世遺物など（第91～93図）を紹介する。

333～337は縄文土器である。333、334は早期の押型文土器である。333は外面に小型の横走山形文が施される。334は小型の楕円文が横走施文される。押型文でも古相のものである。335は早期末の平橋式土器である。336、337は晩期に位置付けられるものである。336は浅鉢で、波状口縁を呈する。外面に沈線による文様が施され、内面には段が付く。337は鉢で、いわゆる遊賀里文様を施す。両者は、豊後高田市（旧香々地町）坂口遺跡を標識とする坂Ⅱ式に比定される。

338～346は土師質土器で、いずれも中世前半の所産である。346は、底径が大きく器高の低いものである。復元口径13.4cmを測る。13世紀中～後葉に位置付けられる。338は底径が7cm以上であるが、やや器高の高いものである。口径12.6cmを測り、13世紀後葉～14世紀にかけてのものか。339～345は底径に比し器高の高いものである。口径11.45～13.8cmを測るもので、13世紀後半以降の所産である。

347～356は土師質土器小皿である。このうち、347～355は中世前半の所産である。体部が短く内湾気味のもの（347）、体部が短く斜方向にのびるもの（348）、体部が斜方向にのびる器高の高いもの（349～351）、体部がやや内湾気味のもの（352～355）などがある。

356～360、362、363は中世後半の所産である。このうち、356～360は体部が短かく立ち上がるものである。358は口縁部がやや外反するが、他は直立気味である。口径は4.0～6.5cmと比較的小型である。362、363は器壁が薄く、底径の小さな底部から体部が斜方向に直線的に開く。口径は7.8～8.6cmである。

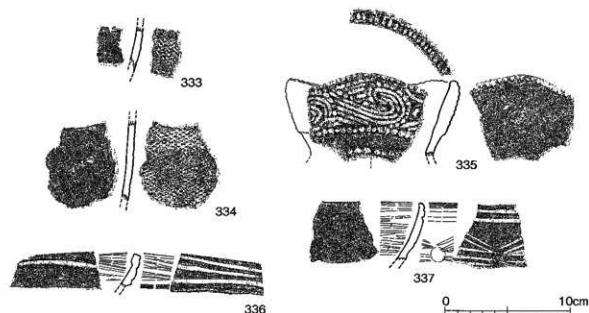
361は底径3.5cmと径の小さな底部をもち、体部が内湾しながら口縁にいたる。器高は1.7cmとやや高い。類似乏しく時期は不明である。

364～366は瓦器碗である。364は内面にヘラミガキが残るもので、13世紀後葉に位置付けられる。365は高台が消失しており、14世紀中葉ころのものか。これらのうち、365、366には体部外面に黒書がみられる。365には「〇」状のものが、366には「工」状のものが書かれている。

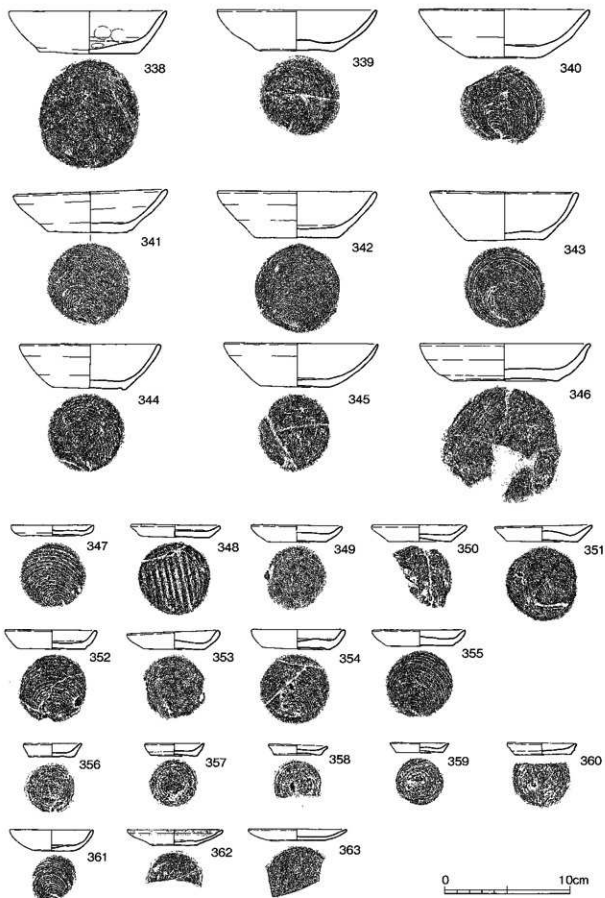
367～372はいずれも青磁である。

373、374は土鍋である。373は復元口径30.6cmで、口縁外側に鐮状の突帯が付く。体部下半にタタキが残る。

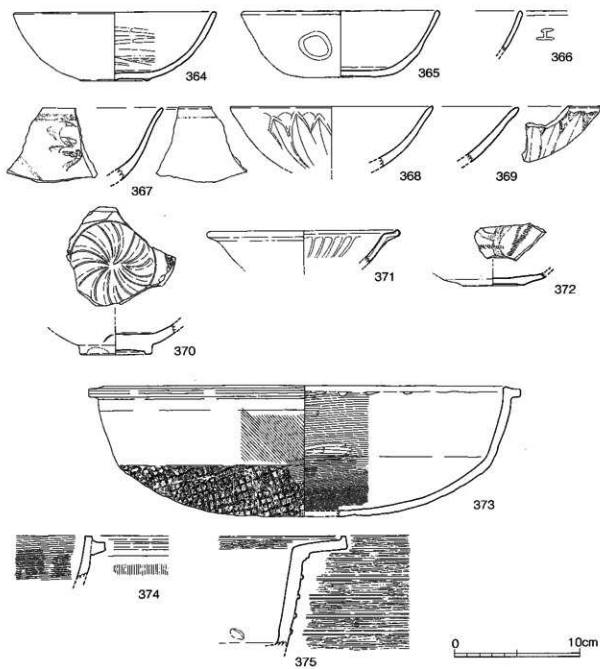
375は瓦質土器鉢である。外面と内面口縁部付近にヘラミガキがみられる。



第91図 古庄屋遺跡 その他の遺物(1)



第92図 古庄屋遺跡 その他の遺物(2)



第93図 古庄屋遺跡 その他の遺物(3)

第4章 まとめ

1 縄文時代

第一次調査及び第二次調査において、少量の縄文時代遺物が出土している。しかし、これらは縄文時代の遺構やプライマリーな包含層に伴うものではなく、多くは中世遺構中に混在するなどして確認されたものである。時期的には、早期と晩期のものがみられる。

早期では、押型文を施す一帯と早期末の南九州系のものがみられる。

押型文は、いずれも小型の押型文を横走施文するもので、山形文と楕円文がみられる(第91図333、334)。第一次調査時に確認されたもの(『古庄屋遺跡』2002 大分県教育委員会 第124図1)は、外面及び内面口縁下に山形文が横走施文される直立する口縁部の資料である。外面には、口縁下3cm程にU形のコブ状突起が、また口縁直下に円形刺突が施される。口縁直立、小型押型文、横走施文等の特徴から、これらは押型文土器でも古相に位置付けることができる。しかし、この段階では大量の無文土器などが伴うことが知られている。本遺跡は、中世の居館や中世末～近世以降の水川造成により縄文時代の姿が大きく改変されているが、検出された縄文時代遺物の量から、本来的には大規模な遺跡ではなく、むしろ小規模な遺跡であったと考えられる。そうした場合、無文土器を欠くという事実が、小規模遺跡ゆえの特別な事情として捉えることも可能であろうか。

早期末の南九州系のものについては、平格式土器など(第91図335)が検出されている。これらについても、量は少量である。

また、晩期については浅鉢と鉢(第91図336、337)が確認されている。この段階の東九州では、内陸部と沿岸部では土器の様相が大きく異なる。すなわち、沿岸部では瀬戸内や近畿地方の影響を色濃くもつものが確認されている。本遺跡検出のものも少量ではあるが、沿岸部における土器様相の範疇で捉えることができる。豊後高田市(旧香々地町)所在の坂口遺跡を標式とする坂口式に比定することができ、内陸部の蒲久保式に併行するものである。

2 中世

中世では、中世前半(13～14世紀)と中世後半(15世紀後半～16世紀前半)の遺構・遺物が確認されている。

(1) 中世前半

中世前半には1町四方の規模に相当する居館がみられる。

・居館の立地

遺跡は、山国川支流の小河川が山塊の間を流れる山間地に位置する。そのため、平野部は少なく、小河川沿いに狭小な谷底平野がみられるのみである。本遺跡は標高110mを測る場所にあるが、本地域にあっては地形的に恵まれた点をいくつか有する。その第一は、交通の要衝という点である。遺跡の所在する地点は、東谷と西谷が出会う重要な場所で、ここを押さえることで東谷と西谷の両谷を管理することが可能であろう。また、東谷は宇佐郡へ、西谷は宇佐郡を経て玖珠郡へ通じており、郡外へ向かう2ルートをも掌握したことになる。第二は、要害の地という点である。遺跡(第2図)の所在する場所は、前面を跡田川と西谷川に、背後を丘陵に囲まれた三角形を呈している。両河川とも岩を深く侵食しており、河床までの深さは約5mを測る。これらが天然の堀としての役割をもち、背後の丘陵と併せ、守るには絶好の地と言える。第三は、広い農業生産地を周辺に有する点である。前述したように、本地域は大部分が山間地で、平坦地は著しく少ない。そのような中において、遺跡の所在する本地域は、東谷と西谷が出会う部分に広い平坦地が形成され、狭小な谷底平野しかみることのできない本地域にあっては第一級の農業生産地を有する地と言えよう。

・居館周辺の状況

当地は、中世居館が立地するにあたっての条件が揃った場所である。居館は、地形の関係から方形館にはなっていないが、北側と南側を溝で囲い、東側の跡田川沿いには柵列を設けている。南側の溝1と北側の溝6の間が約100mを測る。

居館内の施設を検討する前に、居館周辺の状況を確認しておこう。遺跡周辺の字名をみてみると(第2図)、居館の確認された部分(溝1と溝6の間)がほぼ字「古庄屋」である。古庄屋は、「こじょうや」と読むが、庄屋は後世であられたもので、本来「じょうや」は城、館、屋敷を意味するものであった可能性が高い。ちなみに、遺跡背後の丘陵は、現在地元の人々により「ジョウヤ」または「ジョウヤネ」呼ばれており、関連の山城等が存在した可能性が高い。遺跡を見下ろす丘陵上には平坦面が認められ、何らかの施設があったことも考えられる。遺跡の南側は字「浄正」である。地元では「ジョウショウジ」があったと伝承されている。現在、字「浄正」の場所には屋敷が1軒あり、その南側は丘陵が川まで迫っている。この屋敷が、往時の「ジョウショウジ」と何らかの関係またはつながりがある可能性もあろう。遺跡南側には、多宝塔と思われるものや板碑がみられ、伝承を裏付けるものである。板碑は室町時代前半の作と考えられる。遺跡の北側に目を転じると、居館と西谷川にはさまれた所に字「前田」、字「屋敷」、字「大門堂」がみられる。字「前田」部分であるⅢ区には、明らかな中世の遺構は確認されていない。地形的にも、居館よりも一段低く、文字通り居館の前に水田が存在した可能性が高い。字「前田」の東側には、字「屋敷」と字「大門堂」がある。これらの場所は、跡田川と西谷川が合流する狭い部分で、宗教的な施設やそれに関連する施設が存在したことも想定される。これらの地には各々現在も屋敷がみられる。今回の道路新設に伴い屋敷移転後に試掘調査を行ったが、削平が著しく遺構・遺物は確認できなかった。しかし、字「屋敷」と字「大門堂」が現在の屋敷地と重なることを考えれば、字名に残るような歴史的な屋敷や施設の系譜を引くものである可能性は高いと推測される。以上のようにみえてくると、居館周囲の景観を具体的に想定することができる。

・居館を囲する施設

次に、居館内の状況をみる(付図)。居館は南側を幅約25～34mの溝1により、また北側を幅約3mの溝6により囲まれる。両方の溝とも、断面が逆台形を呈し、溝6では確実に数度の掘りなおしが認められる。堀土の観察から各々の溝には土塁が伴ったとみられる。溝1は居館の外側にあたる溝の南側に、溝6は居館の内側にあたる溝の南側に築造されていたと考えられる。土塁が築造されたと思われる部分は、調査においても遺構が確認されておらず、それを裏付けることとなった。また、跡田川沿いの居館東側については、跡田川が天然の堀としての役目を担ってはいるものの、川に沿い柵列が確認されている。西側の丘陵側については、目立った施設は検出されていない。丘陵際が水田造成や後世の石切により若干改変されてはいるが、調査範囲内では溝などの施設は確認されていない。

・土壌墓

本居館で最も特徴的なものが土壌墓である。土壌墓は27基が確認されたが、このうち24基は、溝1の北側、と溝6の南側に、溝に沿うように配置されている。このうち、溝6については溝の南側に土塁があったと想定されており、厳密に言えば、溝6南側の土塁南側において土塁に沿い土壌墓を配置したものである。これら土壌墓の大部分からは人骨や副葬品は検出されておらず、わずかに土壌墓17から副葬品と思われる砥石が確認されているのみである。

これら土壌墓の大きな特色が、その配置である。すなわち、主軸を南北方向にもつものと主軸を東西方向にもつものが交互に規則正しく配置されている。各々の土壌墓には溝などの施設はなく、本来的には土壌墓上に小規模な盛土があったのみと思われる。土壌墓内に石が落ち込んだ例がかなりみられることから、石を使用した何らかの上部施設があったことも考えられる。

溝1に沿っては、大部分が調査区外に及んでいることから、土壌墓の数はさらに十数基増えると思われ、遺跡における総数は40～50基であったと推測される。このような土壌墓の在り方は、大分県内では初例である。居館

内にあることから、屋敷墓と言えるものであろうが、この時期の大方の屋敷墓と思われるものは、①刀、鏡、輸入陶磁器、土師質土器等の副葬品を伴う例が多い。②多くの場合敷基程度である、③その配置に顕著な規則性は見出せない、などの特徴をもち、本遺跡例とは大きく異なる。本遺跡の例を具体的に推測すれば、(A)居館内の住人が死亡した度に次々に埋葬し、その際何らかの理由により軸線を交互にすることに注意をはらい、年代を経て規則正しく埋葬した。(B)戦乱、飢饉、疫病等で一度に多くの死亡者が生じ、何らかの理由により居館内に規則正しく埋葬した。この場合、居館の住人以外の人も埋葬した可能性も含む。(C)本遺跡は居館ではなく寺院などの宗教施設であり、土壇墓群は集団墓である。この場合、遺跡南側にあったと伝承される「ジョウショウジ」が本遺跡であったとも考えられる。(D)墓ではなく、全く別の機能をもった遺構である。以上のような可能性が考えられるが、今後の検討課題としたい。

・ 掘立柱建物

中世前半に位置付けられる建物は、建物1、建物3、建物5、建物6、建物8、建物9、建物10、建物12、建物13、建物14、建物15で、数時期にわたる建替えがなされている。その規模は倉庫などの機能有するであろうと考えられる建物8を除き、いずれも身舎面積30㎡以上で、その平均は52.12㎡である。そのうち最大規模の建物は建物1で、身舎面積79.36㎡を測り、四面に庇を有するものである。建物1については、身舎部分の柱穴の大部分に扁平な河原石が敷かれている。同様な柱穴をもつものとして、建物9がある。以上、建物規模からみても同時期の一般集落の建物規模をはるかに凌駕していることが分る。

・ 居館内の空間利用

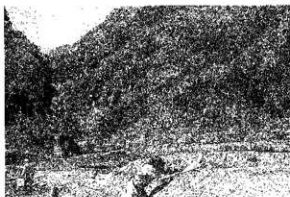
居館内の空間利用をみてみると、前述したように土壇墓が南側と北側の溝に沿い規則正しく配置されている。建物は掘立柱建物が居館中央付近に展開する。最高4回の重複が認められ、居館内の同様な位置が建物の場所として選定されていたことが分る。建物群の東南側には、倉庫的な機能を有すると思われる竪穴遺構が4基重複している。ほぼ同様な位置での建替えが行われたことが分る。また、建物群の西南側には、土壇が集中してみられる。これらの多くは廃棄土壇と思われる。この土壇群中に唯一の井戸である井戸1がある。この空間が居館の様々な日常生活を支える場として利用されたことが推測される。出入口については、確認されていない。当初、地形的にみて、北側にあるものと推定していた。しかし、北側は溝と土壇が設けられ、加えてそれに沿うように土壇墓群が配置されることから出入り口施設を設けるの難しい。すなわち、調査が及んでない北東部にあったものと推定される。以上、居館内の空間利用は、居館の存続した約百数十年間変わることなく整然と行われていた。

・ 居館の性格

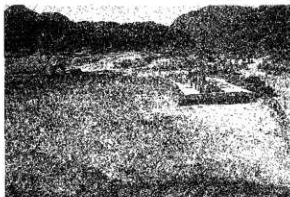
第一次調査の報告書で詳述したので結論のみ述べる。本居館は、鎌倉時代になり下向した東国御家人宇都宮氏一族に属するような勢力による新たな支配機構の中枢としての役割を担っていたものと推測される。

(2) 中世後半

中世前半の居館が、14世紀前半に機能を失った後しばらく空白があり、再びここが利用されるのは15世紀後半以降である。建物は建物2、建物4、建物7、建物11などである。倉庫的な小規模建物である建物7を除く身舎面積の平均は49.68㎡である。中世前半の建物規模よりも劣るとはいえ、中世後半の一般的な集落に比べると規模は大きい。また、第一次調査で土器埋納遺構も2基(SX1、SX2)確認されており、明らかに一般的な集落とは異なる。しかし、集落を明確に画する施設は確認されておらず、火分県内で確認されている同時代の居館と比べると見劣りする。しかし、本遺跡が天然の要害の地であることは先述したとおりで、防衛機能だけで言えば、ことさら溝を巡らせるまでもない。また、土師質土器の坏と小皿については、豊後国内の大部分の地域で、15世紀後半以降に器高の高い坏が出現する。中でも大友氏との繋がりが強いと思われる県南や大野郡、直入郡の多くの地域では府内と同様な土器を使用する。これらの地域では、土器の口径分化が進み、坏と小皿の区別がみられなくなる。これに対し大友氏に対抗する川原氏の勢力下である国東半島地域では、大友氏とは異なる器高の高い坏が出現し、口径分化はせず坏と小皿を作り分ける。本遺跡は、15世紀後半～16世紀前半に位置付けられるが、坏の器高は低く、坏と小皿を作り分けるなど大友氏や川原氏と異なる土器作りが行われている。



遺跡から西谷をのぞむ



I区と西谷川と鑿田川の合流地点をのぞむ



現地説明会



溝6 (東から)



溝6 (西から)



溝6 完掘状況 (西から)



溝6土層断面



井戸1



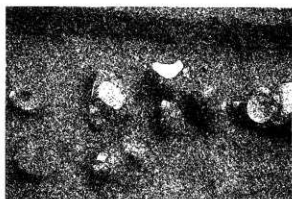
井戸1 完掘状況



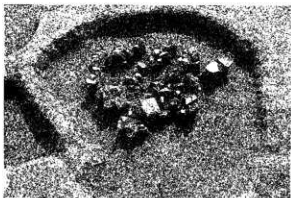
土壇51、土壇52 (西から)



土壇51 遺物出土状況



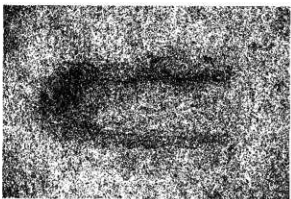
土壇52 遺物出土状況



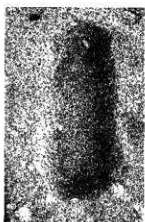
土壇55



土壇墓10



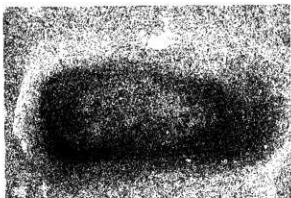
土壇墓11



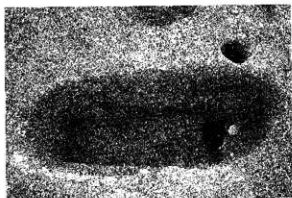
土壇墓12



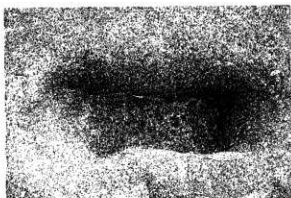
土墳墓13



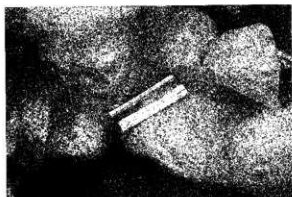
土墳墓14



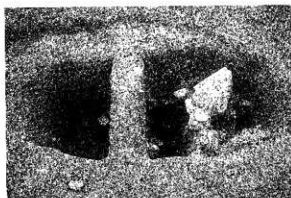
土墳墓15



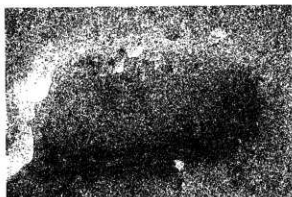
土墳墓17



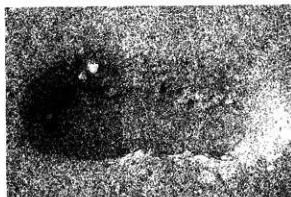
土墳墓17 出土遺物



土墳墓18



土墳墓20



土墳墓21

報告書抄録

フリガナ	コジョウヤイセキⅡ
書名	古庄屋遺跡Ⅱ
副書名	国道212号(中津日田道路：本耶馬溪-耶馬溪)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第18集
編著者	後藤 一重
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
発行年月日	2007年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古庄屋遺跡	中津市本耶馬溪町 大字落合字古庄屋			33° 31' 44"	131° 31' 44"	20030917 ～ 20040315	7300	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古庄屋遺跡	館跡	中世	溝1条 土壇基19基 土壕多数 井戸1基ほか	土師質土器 瓦器 輸入陶磁器 縄文土器ほか	

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

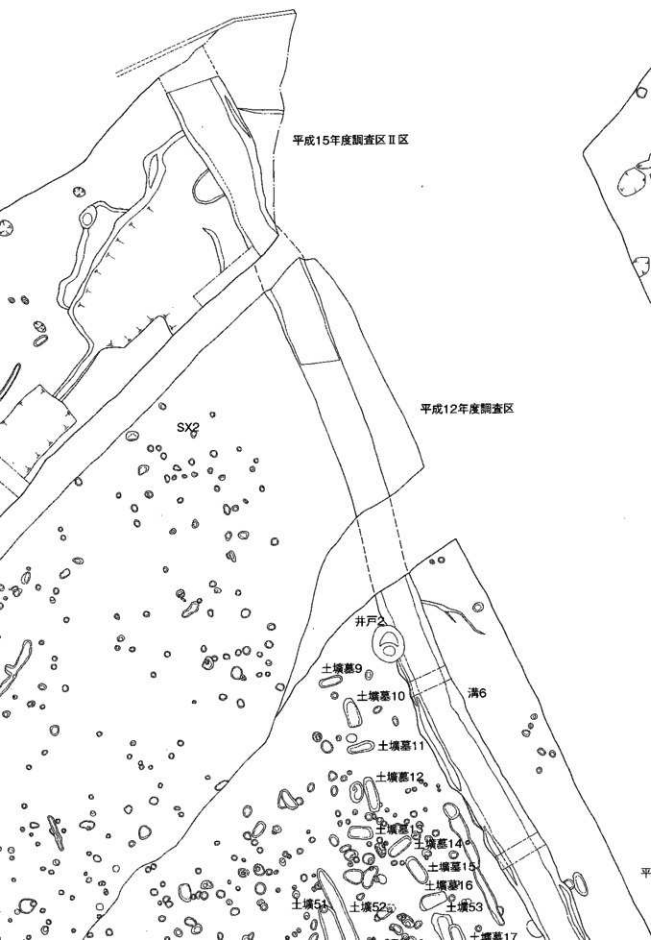
古庄屋遺跡Ⅱ

国道212号(中津日田道路：本耶馬溪-耶馬溪)
道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2007(平成19)年3月30日

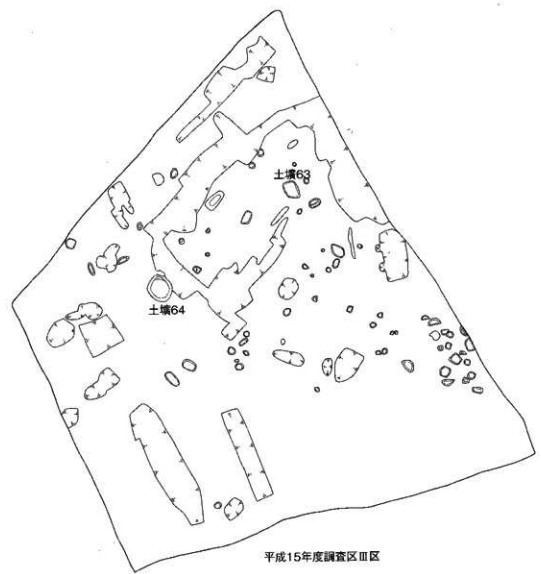
発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL 097-597-5675

印刷 佐伯印刷株式会社
〒870-0844
大分市古国府1155-1
TEL 097-543-1211



平成15年度調査区Ⅱ区

平成12年度調査区



平成15年度調査区Ⅲ区

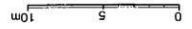
平成15年度調査区Ⅰ区



土壇27

土壇25

土壇26



- 土溝1
- 土溝2
- 土溝3
- 土溝4
- 土溝5
- 土溝6
- 土溝7
- 土溝8

付図 古庄屋遺跡遺構配置図

